

総目録

著者	タイトル	巻	出版年	頁	項目1
神学ダイジェスト研究会	〈巻頭言〉刊行にあたって	1	1965	2	巻頭言
Y・コンガール	母なる教会	1	1965	3～6	教会論一般
R・シュナッケンブルク	信仰の聖書的概念	1	1965	7～12	信仰
C・デーヴィス	説教の神学	1	1965	13～17	司祭職
L・デップナー	司祭生活	1	1965	17～18	司祭職
K・ラーナー	今日の司祭の信仰	1	1965	19～22	信仰
J・ダルク	教会と世間における修道生活の役割	1	1965	23～26	修道生活
L・ルグラン	独身生活	1	1965	27～29	修道生活
L・エルシ	黙想から観想へ	1	1965	30～32	祈り
R=L・ウシリン	教会における一般信徒の立場	1	1965	33～36	位階制
A・ベーム	世に仕えるキリスト者	1	1965	37～39	信仰生活
越前喜六	〈巻頭言〉無題	2	1965	2	巻頭言
H・ジェニー	典礼憲章の一般方針	2	1965	3～6	典礼憲章
L・ボロス	現代神学における死と死後の諸問題	2	1965	7～11	終末論
L・ベルナルト	司祭の独身と性の問題	2	1965	12～15	司祭職
K・ラーナー	霊を消すなかれ	2	1965	16～18	神学的エッセイ
M・D・シュニユ	時のしるし	2	1965	19～23	神学的エッセイ
J・ジント	初代教会における復活	2	1965	24～28	復活
F・カルデーニャ	完全な純潔と人間の感情	2	1965	29～32	修道生活
B・ヘーリング	不妊薬に関する神学的考察	2	1965	33～35	性倫理
D・マイヤー	真の従順に反する奴隷根性	2	1965	36～37	修道生活
越前喜六	〈巻頭言〉キリスト教の土着化について	3	1966	2	巻頭言
S・リヨネ	宇宙の救い	3	1966	3～10	終末論
A・ベア	エキュメニズムに関する教会の実践	3	1966	11～16	エキュメニズム
R・ラトウレール	啓示と歴史と託身	3	1966	17～21	啓示
M・D・シュニユ	貧しき者の教会	3	1966	22～24	教会論一般
P・アンシオー	告解の秘跡と教会の関係	3	1966	25～28	ゆるし
F・ウタール	都市における小教区の問題	3	1966	29～33	司牧
A・ヴェルゴート	大人の信仰生活の心理的条件	3	1966	34～38	司牧
F・ヴルフ	独身生活と童貞性	3	1966	39～41	修道生活
越前喜六	〈巻頭言〉将来の本誌の展望	4	1966	1	巻頭言
I・コロシオ	現代の霊性	4	1966	2～8	霊性神学
K・ラーナー	キリスト教と他宗教	4	1966	9～17	諸宗教の神学
『アメリカ』誌	なぜカトリック教徒になるのか	4	1966	18～19	神学的エッセイ
H・ラーナー	教会の本当の姿	4	1966	20～28	教会論一般
司教覚書	貧しき人々の教会	4	1966	29～30	教会論一般
K・コンドン	旅路の教会	4	1966	31～38	教会論一般
H・ツァーナー	現代世界に開かれた教会	4	1966	39～43	教会論一般
J・クイン	エキュメニズムと聖体	4	1966	44～50	エキュメニズム
I・ゲレス	司祭の独身は時代おくれか	4	1966	51～58	司祭職
E・リドー	レジャーの神学	4	1966	59～64	信仰生活
海老原謙吉	テイヤール・ド・シャルダンの聖体思想	4	1966	65～72	聖体

総目録

L・ベルナール	産児調節と人間の性	4	1966	73～77	生命倫理
P・ネメシエギ	〈巻頭言〉無題	5	1967	1	巻頭言
K・ラーナー	将来のキリスト者	5	1967	2～9	教会論一般
K・ラーナー	知られざるキリスト者	5	1967	10～17	諸宗教の神学
A・ジャニエール	無神論と現代	5	1967	18～25	無神論
J・ライリー	聖書をどう読むか	5	1967	26～34	信仰生活
I・de ラ・ポトリ(ポトウリ)	聖書にはあやまりがない	5	1967	35～42	啓示憲章
A・ベア	教会とキリスト教以外の諸宗教	5	1967	43～49	諸宗教の神学
J・ダヴィド	新しい結婚観	5	1967	50～56	婚姻
O・ゼンメルロート	正しいマリア崇拜	5	1967	57～64	マリア論
J・トマ	労働の神学	5	1967	65～71	キリスト教的社会思想
H・キュンク	恩恵の問題とキリスト者再一致	5	1967	72～78	マルティン・ルター
門脇佳吉	〈巻頭言〉経験の復権	6	1967	1	巻頭言
N・ローフィンク	旧約聖書はどう解釈すべきか	6	1967	2～9	聖書釈義学
H・ホルンシュタイン	聖書と伝承	6	1967	10～16	聖書と伝承
P・トレンブレー	神の十戒	6	1967	17～25	カテキズム
H・マッケープ	神の民	6	1967	26～33	教会論一般
W・リワク	キリストとキリスト者の支配 —黙示録にみる—	6	1967	34～39	黙示録
P・フランセン	教理神学の三つの道	6	1967	40～45	教義
H・リードマッタン	戦争と平和	6	1967	46～51	現代世界憲章
J・ラウシュ	無抵抗主義と敵への愛	6	1967	52～58	マタイ
J・ヌーナン	避妊	6	1967	59～65	性倫理
L・モンダン	奇跡のキリスト教的意味	6	1967	66～71	奇跡
B・ヘーリング	忘れ去られた兄弟愛	6	1967	72～79	司牧
福島禎一	〈巻頭言〉もっと人間味を	7	1967	1	巻頭言
E・リドー	サルトルのヒューマニズムとキリスト教	7	1967	2～11	神学的エッセイ
K・ラーナー	キリスト教的ヒューマニズムとマルクス主義的ヒューマニズム	7	1967	12～17	神学的人間論
E・パン	使徒的修道会と社会文化的変化	7	1967	18～25	修道生活
フランス調査報告	労働者への宣教	7	1967	26～30	司牧
H・ド・リュバック	すばらしき母「教会」	7	1967	31～38	教会論一般
B・ヘーリング	道德生活の新しさ	7	1967	39～45	倫理神学一般
J・フックス	罪と改心	7	1967	46～53	罪
J・カトワール	教会と再婚	7	1967	54～59	婚姻
J・ムールー	信仰における理性の役割	7	1967	60～64	信仰生活
P・グルロー	キリストの秘義“死”	7	1967	65～72	キリスト論
L・ボロス	苦しみと死	7	1967	73～80	神学的人間論
林省吾	〈巻頭言〉対話	8	1967	1	巻頭言
P・ショーネンベルク	聖体におけるキリストの現存とは	8	1967	2～10	聖体
T・マートン	降誕のよき知らせ —修道者の立場からの読み方—	8	1967	11～17	神学的エッセイ
P・ビヤール	聖書における清貧	8	1967	18～25	新約聖書神学
F・ムスナー	史実のイエズスと信仰のキリスト	8	1967	26～33	キリスト論
H・スミス	現代人に典礼は意味があるか	8	1967	34～39	典礼一般
D・アムリーヌ	キリスト教的価値と世俗的価値	8	1967	40～48	倫理神学一般

総目録

H・U・v・バルタザール	福音的生活	8	1967 49～55	修道生活
J・B・メッツ	創造的態度和しての希望	8	1967 56～63	終末論
L・ボロス	摂理について	8	1967 64～67	神学的エッセイ
B・ヘーリング	変動する倫理神学	8	1967 68～75	倫理神学一般
J・フィルハウス	〈巻頭言〉神学と歴史	9	1968 1	巻頭言
J・クレーマー	キリストの復活の証言	9	1968 2～7	復活
M・ブレンドレ	初代教会の復活信仰	9	1968 8～14	復活
J・ダニエル	非神話化をどう考えるか	9	1968 15～18	新約聖書神学
A・ミシエル	原罪と人類の起源	9	1968 19～28	原罪
B・ヘーリング	キリスト者の成熟とは何か	9	1968 29～32	信仰生活
R・マッケンジー	聖書神学とはなにか	9	1968 33～40	聖書神学一般
J・マッケンジー	神感の社会的性格	9	1968 41～47	聖書神学一般
R・マルレ	世俗都市	9	1968 48～55	セキュラリズム
I・レウイス(ルイス)	子どもの告解の秘跡	9	1968 56～62	ゆるし
R・ローランタン	マリアとキリスト教的女性観	9	1968 63～71	マリア論
C・ムーニー	テイヤール・ド・シャルダンとキリスト論	9	1968 72～80	テイヤール・ド・シャルダン
I・カニャーダ	〈巻頭言〉神	10	1968 1	巻頭言
R・マルレ	新約聖書の非神話化理論について	10	1968 2～9	新約聖書神学
R・E・ブラウン	ヨハネ福音書はどのようにしてできたか	10	1968 10～17	ヨハネ
M・ノバク	祈りは「おねだり」か	10	1968 18～21	祈り
E・パン	都市の小教区	10	1968 22～29	司牧
E・グートベンガー	聖体の現存の秘義	10	1968 30～37	聖体
W・カスパー	教義の歴史性	10	1968 38～45	教義
W・カスパー	教義と福音	10	1968 46～48	教義
F・クロウ	教義の発展 —キリスト教一致の助けとなるか—	10	1968 49～56	エキュメニズム
J・マッケンジー	人の子は苦しまなければならない	10	1968 57～63	受難
D・マッカーフィー	自殺《その神学的考察》	10	1968 64～68	生命倫理
J・アルファロ	ベルソナと神の恵み	10	1968 69～75	三位一体論
K・ラーナー	無信仰者に信仰を説くには	10	1968 76～80	カテキズム
古谷功	〈巻頭言〉聖書補助学の再評価	11	1968 1	巻頭言
K・ラーナー	刷新する教会	11	1968 2～7	教会論一般
L・ヘードル	神の教会と対話	11	1968 8～15	教会論一般
J・ダニエル	科学者と信仰者	11	1968 16～19	自然科学と神学
C・ムーニー	歴史に流れる霊性	11	1968 20～26	霊性神学
H・ド・リュバック	あすの聖人	11	1968 35～38	聖人
J・ナポーヌ	ヨハネ福音書の主題	11	1968 39～45	ヨハネ
A・ジョルジュ	ルカ福音書における「神の子」	11	1968 46～51	ルカ
F・ヘイグ	聖書のヒューマニズム	11	1968 52～54	神学的エッセイ
J・マッケンジー	新約における律法	11	1968 57～60	新約聖書神学
D・マッカーシー	イスラエルは私の長子	11	1968 61～68	旧約聖書神学
P・グルロ	〈原罪〉を信すべきか	11	1968 69～77	原罪
編集委員	〈巻頭言〉公会議後まる三年を経て	12	1968 1	巻頭言
カナダ司教団	フマネ・ヴィテをめぐって	12	1968 2	回勅

総目録

イギリス司教団	フマネ・ヴィテをめぐって	12	1968	3	回勅
K・ラーナー	産児調節の回章《その波紋と課題》	12	1968	4～9	回勅
J・ゴルトブルンナー	信仰と深層心理学	12	1968	10～16	信仰生活
T・マルテンス	現代人と典礼	12	1968	17～26	典礼一般
Y・コンガール	一致を求める祈りの神学	12	1968	27～31	祈り
R・ラトゥレール	聖性は啓示のしるし	12	1968	32～39	啓示
J・マックオーリー	神をどのように考えたらよいか	12	1968	40～47	神概念
R・コムストック	『神の死』以後の神学	12	1968	48～56	神概念
R・ヘブルスウェイト	ジョン・ロビンソンの思想	12	1968	57～62	神学的エッセイ
J・デュボン	イエスの受けた試み	12	1968	63～69	新約聖書神学
H・シュールマン	イエスの幼年物語は歴史か —ルカ1～2章の前史の構造・特色・歴史的価値—	12	1968	70～76	ルカ
佐久間彪	〈巻頭言〉思而不学則殆	13	1969	1	巻頭言
J・ベッツ	過越の神秘	13	1969	2～11	新約聖書神学
ドイツ司教団	「イエスは復活した」	13	1969	12～15	復活
A・ヴァノア	共観福音書が語る受難	13	1969	16～21	受難
R・E・ブラウン	第四福音書のパラクリトス	13	1969	22～27	ヨハネ
P・アンシオー	性と婚約	13	1969	28～31	性倫理
H・ド・リュバック	人間像の理解へ	13	1969	32～35	神学的人間論
J・マレー	教会の権威と自由	13	1969	36～44	教会論一般
F・ヴルフ	司祭・修道者・信徒	13	1969	45～47	教会論一般
J・ギトン	あすの司祭像	13	1969	48～51	司祭職
J・バーンズ	説教きのつきょう	13	1969	52～57	司牧
R・ディディエ	サタンとは《その神学的考察》	13	1969	58～64	悪魔
L・A・シェーケル	言語学と文学からみた聖書釈義学	13	1969	65～71	聖書釈義学
K・ラーナー	聖体訪問のすすめ	13	1969	72～77	聖体
K・ヴァルケンホルスト	〈巻頭言〉心を信じる	14	1969	1	巻頭言
G・ローフィンク	イエスの復活と史的批判	14	1969	2～11	復活
S・リヨネ	死と復活によるあがない	14	1969	12～16	復活
R・マレー	信仰を失うとは	14	1969	17～22	信仰生活
G・ランブ	世俗化とは —新約聖書と初代教会に探る—	14	1969	23～29	セキュラリズム
K・ラーナー	神への愛と隣人愛	14	1969	30～39	信仰生活
J・C・マレー	修道誓願にまつわる弊害	14	1969	40～45	修道生活
O・ゼンメルロート	聖体祭儀と内省	14	1969	46～50	典礼神学
B・ドレイア	イエスの奇跡の宣教	14	1969	51～56	奇跡
D・マッカーシー	神の言葉と文学的装飾	14	1969	57～62	聖書釈義学
B・デ・ピント	言葉の神秘性	14	1969	63～68	神学的エッセイ
L・マルヴェ	イエスのメッセージと救済史〈1〉 —クルマンとブルトマン—	14	1969	69～78	キリスト論
安田貞治	〈巻頭言〉宣教者と神学	15	1969	1	巻頭言
H・U・v・バルタザール	貧しき者の信仰	15	1969	2～13	信仰
スイス司教団	だれでも平和のために尽くせる	15	1969	14	エッセイ
B・ヘーリング	福音の革命 —暴力か非暴力か—	15	1969	15～23	キリスト教的社会思想
C・スピック	神の前での人格的決断	15	1969	24～30	倫理神学一般
H・シュールマン	イエスを囲む生活	15	1969	31～39	修道生活

総目録

K・ラーナー	公会議後の神学と教導職	15	1969 40～49	教導職
G=M・ニッシム	告解の共同祭儀	15	1969 50～56	ゆるし
L・マルヴェ	イエスのメッセージと救済史〈2〉 —クルマン説の批判—	15	1969 57～63	キリスト論
R・グアルディーニ	パラダイスとは	15	1969 64～68	終末論
A・ヴァネステ	原罪の神学と子どもの洗礼	15	1969 69～77	原罪
J=S・アリエタ	〈巻頭言〉神学における〈霊の識別〉	16	1969 1	巻頭言
K・ラーナー	無神論者もキリスト者たりうるか	16	1969 2～12	無神論
J・—B・コバーン	信仰の疑い	16	1969 13	信仰
L・エヴェリー	現代人は信仰しうるか	16	1969 14～17	信仰
R・ガロディ	キリスト教とマルクス主義者の対話 —マルクス主義の立場から—	16	1969 18～25	キリスト教とマルクス主義
J・B・メッツ	キリスト者とマルクス主義者の対話 —キリスト者の立場から—	16	1969 26～31	キリスト教とマルクス主義
L=J・スーネンス	教会はまだまだ変わる〈第一回〉	16	1969 32～36	教会論一般
B・マッグラス	ミドラシュとは何か	16	1969 46～51	ユダヤ教
A・ダレス	象徴・神話・聖書の啓示	16	1969 52～60	神話
R・トウッチ	プロテスタント教会との再一致	16	1969 61～67	エキュメニズム
B・クラウス	洗礼の歴史	16	1969 68～76	洗礼
沢田和夫	〈巻頭言〉苦しい娑婆を陽気に	17	1970 1	巻頭言
L=J・スーネンス	教会はまだまだ変わる〈第二回〉	17	1970 2～13	教会論一般
B・シュラー	教会の教導職も誤りうるか	17	1970 14～22	教導職
A・ブシャー	未来の宣教者	17	1970 23～25	福音宣教
H・ヌーウェン	新しい時代の司牧者	17	1970 26～35	司祭職
A・グリーリー	司祭はどのような指導者か	17	1970 36～42	司祭職
J・ラッツィンガー	聖書の人間観	17	1970 43～51	神学的人間論
F・デュルウェル	聖書におけるキリストとの出会い	17	1970 52～57	信仰生活
G・ディークマン	典礼と個人的信心	17	1970 58～64	典礼一般
F・ルパルニユール	キリスト者にとって病気とはなにか	17	1970 65～71	信仰生活
H・ブイヤール	キリスト教倫理と一般倫理	17	1970 72～77	倫理神学一般
土屋吉正	〈巻頭言〉信仰に生きる	18	1970 1～2	巻頭言
J・ティヤール	聖体における聖霊の働き	18	1970 4～8	聖体
I・de ラ・ポトリ	わたしは道・真理・生命である	18	1970 9～17	ヨハネ
D・ベルトラン	イエスは地獄について何を語ったか	18	1970 18～25	終末論
P・フイツィング	自然法と教会	18	1970 26～29	教会法
W・ブルクハルト	真理と教会の自由	18	1970 30～37	教会論一般
H・ミュラー	ルターの十字架の黙想	18	1970 38～46	マルティン・ルター
R・レドモンド	幼児洗礼 —歴史と司牧的問題—	18	1970 47～53	洗礼
M・ロンデ	修道生活はどうなるか	18	1970 54～57	修道生活
A・ドンデーヌ	世俗化と信仰	18	1970 58～67	セキュラリズム
A・ブルンナー	労働の聖化	18	1970 68～77	キリスト教的社会思想
市川裕	〈巻頭言〉司牧者	19	1970 2～3	巻頭言
K・ラーナー	秘跡としての結婚	19	1970 4～11	婚姻
J・ラッツィンガー	結婚の神学	19	1970 12～22	婚姻
R・グアルディーニ	性の乱れ	19	1970 23～27	性倫理
M・ベレー	此岸と彼岸	19	1970 28～35	終末論

総目録

『リゴリアン』誌	民衆の抗議と市民の不服従	19	1970 36~40	キリスト教的社会思想
ヘルダー・コレスポンデンツ誌	発展と衰微	19	1970 41	教会論一般
J・F・ガレン	女性と霊性	19	1970 42~49	霊性神学
J・パートネス	苦しみの積極的意味	19	1970 50~55	信仰生活
Y・コンガール	人間 —この呼ばれている存在—	19	1970 56~60	神学的人間論
I・ベック	神の民の祭司職	19	1970 61~67	信徒使徒職
X・レオン・デュフール	聖書学者に期待されるもの	19	1970 68~77	聖書釈義学
井上洋治	〈巻頭言〉未来の「日本の神学」への期待	20	1970 2~7	巻頭言
B・ロナガン	神学と人間の未来	20	1970 8~17	ロナガン
G・ボウム	二千年代の教会はどうなる? —教会は一つの社会ではなく、動きである—	20	1970 18~25	教会論一般
R・マクブライエン	エキュメニズムのゆくえ	20	1970 26~32	エキュメニズム
Y・モルトマン	福音の新しい解釈をめざして	20	1970 33~37	新約聖書神学
J・W・グレーザー	大罪によって恩恵はなくなるか	20	1970 38~41	罪
G・フォーラー	旧約聖書の中心点は何か	20	1970 42~48	旧約聖書神学
P・シムソン	「神の都」のドラマ —ルカ福音書のエルサレム物語—	20	1970 49~58	ルカ
D・ミラー	なぜ神は人となったか	20	1970 59~67	ヘブライ書
K・ラーナー	待降節の訪れ	20	1970 68~72	神学的エッセイ
J=L・モレイ	〈巻頭言〉性の人間化	21	1971 2~3	巻頭言
C・ムーニー	現代世界憲章と神学の未来	21	1971 4~14	現代世界憲章
A・ブレ	独身生活の情緒的欠陥はどう補われるか	21	1971 15~23	修道生活
A・プレ	人間の性行為	21	1971 24~25	性倫理
M・ジョイス	貞潔は性の自由をもたらすか	21	1971 26~31	修道生活
J・ギエ	イエス・キリストの純潔	21	1971 32~41	キリスト論
L・ボーステン	聖書のしおり(1)正しい祈りとは	21	1971 41	信仰生活
M・マサール	福音の宣教は今日でも意味があるか	21	1971 42~47	福音宣教
G・クヴァール	聖書と聖伝	21	1971 48~57	聖書と伝承
K・ラーナー	復活祭の喜び	21	1971 58~63	神学的エッセイ
I・de ラ・ポトリ	人の子は上げられる	21	1971 64~73	キリスト論
M・ディベリウス	初めに永遠のみことばがあった	21	1971 74~76	ヨハネ
L・アルンプルスター	〈巻頭言〉修道生活のゆくえ	22	1971 2~5	巻頭言
A・ラーキン	修道生活に関する聖書的・神学的側面	22	1971 6~18	修道生活
D・ベルトラン	完全さは修道者の専売特許か	22	1971 19~25	修道生活
R・ヴォワイヨーム	現代人と観想	22	1971 26~33	信仰生活
F・ヘングスバハ	教会内での信徒の位置	22	1971 34~40	教会論一般
『キャソリック・マインド』	教会の共同責任性	22	1971 41~43	教会論一般
F・バクレイ	共同典礼参加の原則	22	1971 44~54	典礼神学
P・テイヤール・ド・シャルダン	諸宗教の合流	22	1971 55~61	諸宗教の神学
H・コックス	信仰の新たな可能性	22	1971 62~69	信仰
L・ボーステン	聖書のしおり(2)是非すべからず	22	1971 70~71	信仰生活
K・ラーナー	生ける死者の日に	22	1971 72~77	神学的エッセイ
薄田昇	〈巻頭言〉骨より肉を	23	1971 2~3	巻頭言
R・シュールマン	道の大家、マイスター・エックハルト	23	1971 4~12	中世思想
M・エックハルト	みことばを宣べ伝えなさい	23	1971 13~16	原典資料

総目録

B・フレニョ・ジュリアン	三位一体の神秘	23	1971 17～25	三位一体論
H・ド・リュバック	危機の渦中にある教会	23	1971 26～36	教会論一般
Y・コンガール	宣教の必要性	23	1971 37～43	福音宣教
L・ボーステン	聖書のしおり(3)信じること	23	1971 44～45	信仰生活
P・ド・シュルジ	福音と暴力	23	1971 46～56	新約聖書神学
A・フォンセカ	ガンジーと非暴力	23	1971 57～60	エッセイ
G・バウムバハ	イエスとファリサイ人	23	1971 61～69	キリスト論
X・レオン・デュフル	復活したイエスの現存	23	1971 70～78	復活
濱尾文郎	〈巻頭言〉神の教会	24	1971 2～3	巻頭言
M・レーラー	討論資料として —キュンク著『質問—誤りえないか』評—	24	1971 4～13	教導職
K・ラーナー	ハンス・キュング批判	24	1971 14～20	教導職
K・ラーナー	カトリック神学における不可謬性	24	1971 21～27	教導職
ドイツ司教団	啓示と教義と信仰	24	1971 28～29	教導職
H・キュンク	なぜ私は教会にとどまっているか	24	1971 30～35	教導職
L・ボーステン	聖書のしおり(4)私にとってキリストとはだれか	24	1971 36～37	信仰生活
J・ボレマン	ルカ福音のカテケシスにおける聖霊	24	1971 38～48	ルカ
H・シュリーア	時の終わり	24	1971 49～56	終末論
C・ベルナール	召命の理念	24	1971 57～68	召命
G・—M・ベラー	エレミヤの召命の危機	24	1971 69～78	エレミヤ
林省吾	〈巻頭言〉経験	25	1972 2～3	巻頭言
W・ライヒ／L・ファーラー	無効な婚姻をいやす道	25	1972 4～16	婚姻
C・デュコク	今日の結婚	25	1972 17～25	婚姻
W・バセット	離婚と再婚	25	1972 26～35	婚姻
L・ボーステン	聖書のしおり(5)復活	25	1972 36～37	信仰生活
E・スキレベークス	キリスト教の死生観	25	1972 38～41	終末論
J・オニール	イエスの沈黙	25	1972 42～46	キリスト論
H・U・v・バルタザール	なぜ私はキリスト者なのか	25	1972 47～52	信仰
J・ラッツィンガー	なぜ私は教会にとどまるのか	25	1972 53～57	信仰
J・ラッツィンガー	司祭の役務	25	1972 58～63	司祭職
K・ラーナー	主の現れ	25	1972 64～69	神学的エッセイ
J・カファレナ	神概念の吟味	25	1972 70～77	神概念
柳瀬睦男	〈巻頭言〉学問・言語・神	26	1972 2～3	巻頭言
B・ロナガン	現代こそ信頼が	26	1972 4～13	ロナガン
K・リーゼンフーバー	キリスト論の基礎的考察 —ラーナーのキリスト論—	26	1972 14～21	キリスト論
K・ラーナー	キリストの心	26	1972 22～26	神学的エッセイ
Y・コンガール	告解の秘跡に関する教えと司牧	26	1972 27～37	ゆるし
P・リガ	告解とミサ	26	1972 38～44	ゆるし
M・テュリアン	新しい奉獻文の神学	26	1972 45～58	典礼神学
W・カスパー	現代における神体験の可能性	26	1972 59～71	神体験
L・ボーステン	聖書のしおり(6)不正なマンモン	26	1972 72～73	信仰生活
P・ショーネンベルク	啓示と経験	26	1972 74～80	啓示
I・マルティーニ	〈巻頭言〉無題	27	1972 2～4	巻頭言
E・シャラート	なぜ司祭職を放棄するのか	27	1972 6～22	司祭職

H・シュリーア	新約聖書における司祭職	27	1972 23～30	司祭職
M・ファン・カスター	激動する現代世界の司祭	27	1972 31～45	司祭職
S・リヨネ	新約聖書と原罪	27	1972 46～52	原罪
D・スタンリー	救いといやし	27	1972 53～65	奇跡
E・リドー	テイヤール・ド・シャルダンによる「性」	27	1972 66～76	テイヤール・ド・シャルダン
奥村一郎	〈巻頭言〉ゼロの視点	28	1972 2～3	巻頭言
K・ラーナー	キリスト教の新しい基本的信条	28	1972 4～14	教義
K・ラーナー	現代世界観におけるキリスト論	28	1972 15～23	キリスト論
J・カファレナ	現代のキリスト教	28	1972 24～31	信仰
R・マルレ	解釈学とカテキシス	28	1972 32～36	カテキズム
J・ラッツィンガー	信仰のキリストとユーカリスト	28	1972 37	神学的エッセイ
M・ファン・カスター	イエス・キリストへの信仰	28	1972 38～46	信仰
J・モワン	歴史的確実性と信仰	28	1972 47～58	信仰
聖公会／カトリック委員会	ユーカリストの教理についての合意声明	28	1972 60～66	聖体
聖公会／カトリック委員会	合意声明とキリスト教的一致	28	1972 67～70	エキュメニズム
A・ライダー／B・バイロン	合意声明をめぐって —解説と論評—	28	1972 71～78	エキュメニズム
瀬戸勝介	〈巻頭言〉たゆみない祈り	29	1973 2～3	巻頭言
K・ラーナー	祈りについて	29	1973 4～14	祈り
P・ホッキン	祈りの分かち合い	29	1973 15～23	祈り
J・マッケンジー	救いの意味	29	1973 24～32	救済論
F・ヴルフ	われわれの真ん中に立つイエス・キリスト	29	1973 33～38	キリスト論
X・レオン・デュフォル	聖書解釈学者と歴史的出来事	29	1973 39～47	聖書釈義学
M・ケール	教会にいる喜び	29	1973 48～55	教会論一般
A・G・モリナ	教会の世論はやかましいドラカ	29	1973 56～63	教導職
E・スキレベークス	新しい司祭像の神学的考察	29	1973 64～73	司祭職
J・カファレナ	イエス・キリスト —真の人・真の神—	29	1973 74～80	キリスト論
K・ライフ	〈巻頭言〉ペンテコステより離散教会へ	30	1973 2～3	巻頭言
堀田雄康	ヨハネの「ロゴス」とパウロの「神の像」	30	1973 4～19	キリスト論
J・ラッツィンガー	実体変化をめぐって —聖体の意味を問う—	30	1973 32～39	聖体
F・シュタインメッツ	ふさわしい主の晩餐とは	30	1973 40～42	聖体
E・ダスマン	「キリストの体—アーメン」	30	1973 43～47	聖体
J・カファレナ	信仰について	30	1973 48～55	信仰
宋 正孝	みことばの随想	30	1973 56～58	エッセイ
A・ダレス	宣教神学の動向	30	1973 60～70	福音宣教
A・ダレス	啓示の考え方とその変遷	30	1973 71～79	啓示
杉田稔	〈巻頭言〉ミシェル・クオストに倣っての祈り	31	1973 2～3	巻頭言
B・ヘーリング	世俗化時代の祈り	31	1973 4～12	祈り
J・カファレナ	〈続〉信仰について	31	1973 13～15	信仰
H・シュリーア	ヨハネ福音書におけるキリスト論	31	1973 16～27	ヨハネ
R・ヴァイヤー	「聖書のみ」か	31	1973 28～37	マルティン・ルター
J・クイーン	新約聖書における奉仕職	31	1973 38～47	司祭職
R・シュナッケンブルク	ペトロと他の使徒との関係	31	1973 48～55	位階制
W・カスパー	教会における司祭の役割	31	1973 56～67	司祭職

総目録

J・ラッツィンガー	司祭職の意義	31	1973 68～80	司祭職
A・マタイス	〈巻頭言〉愛の建設	32	1973 2～3	巻頭言
N・ローフィンク	イスラエルとユダの一致	32	1973 4～8	旧約聖書神学
W・ブルガー	教会一致の可能性	32	1973 9～15	エキュメニズム
L・A・シェーケル	あがないは連帯性を表す	32	1973 16～24	聖書神学一般
K・シェルクレ	新約聖書における報いと罰	32	1973 25～30	罪
J・カファレナ	体験と表現	32	1973 31～39	信仰
M・ケール	希望の物語 ―クリスマスに―	32	1973 40～43	神学的エッセイ
J・マッケンジー	インマヌエル	32	1973 44～49	旧約聖書神学
P・ベルナディケー	ルカにおける喜びの神学	32	1973 50～66	ルカ
R・シュルテ	神を父と呼ぶ	32	1973 67	神学的エッセイ
D・ドース	アバ、父よ	32	1973 68～74	キリスト論
O・ブルック	三位一体の影響	32	1973 75～78	三位一体論
安井光雄	〈巻頭言〉神学と教会法学の対話	33	1974 2～3	巻頭言
L・エルシ	教会における法	33	1974 4～9	教会法
R・E・ブラウン	未熟さは婚姻障害となるか	33	1974 10～15	教会法
P・パーマー	キリスト教的結婚	33	1974 16～26	婚姻
J・レアル	イエスの母がいた	33	1974 27～31	マリア論
J・ブライ	しるしと奇跡	33	1974 32～39	奇跡
Z・アルセギ／M・フリック	原罪 ―トレント公会議の真意―	33	1974 40～51	原罪
L・ジョンストン	肉と霊	33	1974 52～59	新約聖書神学
J・オルルク	ローマ書のピステイス	33	1974 60～66	ローマ書
F・キーン	多様性の神学 ―ラーナーの思想と修道生活―	33	1974 67～80	諸宗教の神学
H・クルーゼ	〈巻頭言〉新しい司祭像をめぐって	34	1974 2～4	巻頭言
パウロ六世	ラテン教会に修身助祭を復興させるための一般規則	34	1974 5～12	助祭職
E・エクリン	助祭職の神学的領域	34	1974 13～21	助祭職
J・リース	新約聖書における奉仕職のあり方 ―終身助祭職の役割をめぐって―	34	1974 22～29	助祭職
『プロ・ムンディ・ヴィタ』	世界各地における助祭職の現状	34	1974 30～38	助祭職
K・シャッツ	カリスマと相対性	34	1974 39～43	聖霊
H・キュンク	神の言葉と霊のきずな	34	1974 44～46	聖霊
J・ラッツィンガー	神の民の指導者	34	1974 47～53	司祭職
H・U・v・バルタザール	新約聖書における司祭像	34	1974 54～60	司祭職
W・ヨーマンズ	信仰による祈り	34	1974 61～68	信仰生活
X・レオン・デュフォル	人間は死後どうなるか	34	1974 69～80	終末論
中垣純	〈巻頭言〉福音宣教に思う	35	1974 2～4	巻頭言
H・ミューレン	堅信の秘跡	35	1974 5～13	堅信
A・ガーノーチ	感謝の祭儀	35	1974 14～26	ミサ
H・マイヤー	回心の祭儀	35	1974 27～31	ゆるし
P・パーマー	病者の塗油	35	1974 32～41	病者の塗油
L・J・スーネンス	明日の教会〈第一回〉	35	1974 42～51	教会論一般
H・スミス	多忙な人の静寂の祈り	35	1974 52～59	祈り
M・ニーデンタル	福音のアイロニーとは	35	1974 60～68	新約聖書神学
K・シェルクレ	希望	35	1974 69～79	終末論

総目録

J・ソレ	〈巻頭言〉神愛と隣人愛 —U・ルスに従って—	36	1974 2~3	巻頭言
L・ーJ・スーネンス	明日の教会〈第二回〉	36	1974 4~13	教会論一般
J・エレミアス	イエスの生涯と初代教会における祈り	36	1974 14~23	典礼史
F・ハーネ	新約聖書と初代教会にみる宣教	36	1974 24~37	福音宣教
R・マルレ	現代人の信仰告白を試みて	36	1974 38~48	教義
J・カファレナ	救い主	36	1974 49~56	キリスト論
H・マンデルス	誰が典礼の主体か	36	1974 57~62	典礼神学
P・グルロ	聖書への三つの問い	36	1974 63~69	旧約聖書神学
J・ゲルハルト	教会基本法は必要か	36	1974 70~79	教会法
A・G・エバンヘリスタ	〈巻頭言〉私の修道生活の意味	37	1975 2~3	巻頭言
C・チェリアン	いま、私の目で神を見る —宗教体験の記録としての聖書—	37	1975 4~13	神体験
W・コナリー	長所を生かす霊的指導	37	1975 14~17	霊的指導
G・アシエンブレンナー	意識の糾明	37	1975 18~27	イエズス会霊性
P・シュンゲル	イエスの死	37	1975 28~35	キリスト論
Y・コンガール	働く聖霊	37	1975 36~47	聖霊
N・アベヤシंगा	回心の秘跡と聖霊	37	1975 48~54	ゆるし
H・キュンク	洗礼の完成としての堅信の秘跡	37	1975 55~67	堅信
J・ウィナンディ	最後の審判の情景	37	1975 68~79	終末論
T・オーブロンク	〈巻頭言〉「心を込めて神を仰ぎ」	38	1975 2~4	巻頭言
G・カールソン	死から命へ —霊的指導と過越の神秘—	38	1975 5~15	霊的指導
J・ドミニアン	独身生活と共同体	38	1975 16~23	修道生活
K・ラーナー	信仰の核心は生の中軸	38	1975 24~33	信仰
P・ホッキン	キリスト者はどう祈るか	38	1975 34~41	祈り
T・デュベイ	黙想の諸形質とその問題	38	1975 42~53	祈り
J・リース	セレブレーションと宣教	38	1975 54~61	福音宣教
G・ソレアス・プラグ	福音書は歴史的か	38	1975 62~69	聖書釈義学
R・ペロディ	罪の意識と赦し	38	1975 70~79	ゆるし
景山あき子	〈巻頭言〉聖霊とともに	39	1975 2~3	巻頭言
W・ヘルプストリート	リジューのテレーズにおける〈とりなし〉と〈連帯〉	39	1975 4~11	霊性一般
J・ギエ	イエスの死苦と人間	39	1975 12~19	キリスト論
R・バウマン	イエスの復活とは何をいうのか	39	1975 20~31	復活
K・ラーナー	復活信仰の霊性をめぐって	39	1975 32~41	復活
J・カファレナ	キリストの神秘	39	1975 42~49	キリスト論
D・ハスキ	啓示の継続	39	1975 50~55	啓示
K・ラーナー	教会の使命は世界を人間らしくすることか	39	1975 56~62	教会論一般
G・ラップ	宗教的多様性とその課題	39	1975 63~67	諸宗教の神学
H・ラヴァレット	性と政治	39	1975 68~80	倫理神学一般
白柳誠一	〈巻頭言〉適切な表現と提示方法	40	1976 2~3	巻頭言
K・ラーナー	病者の自由 —その神学的考察—	40	1976 8~18	生命倫理
C・サイクス	テイヤール・ド・シャルダンと宇宙的キリスト	40	1976 19~25	テイヤール・ド・シャルダン
H・ヌーウェン	歓待のすすめ —ホスピタリティーとキリスト者—	40	1976 26~29	司牧
B・エリソンド	聖書に学ぶ福音宣教	40	1976 30~40	福音宣教
J・ラデルマーケス	復活したキリストを宣教する〈1〉	40	1976 41~49	復活

総目録

L・サブラン	イエスの奇跡	40	1976 50～58	奇跡
R・コスト	マルクス主義とキリスト者の生活	40	1976 59～65	キリスト教とマルクス主義
J・マーティン	マタイにおける教会	40	1976 66～74	教会論一般
山本襄治	〈巻頭言〉神学と司牧	41	1976 2～3	巻頭言
G・ローフィンク	死後、何が到来するか	41	1976 4～15	終末論
L・ケーシー	安楽死の倫理 —カレン・クインランの場合—	41	1976 16～21	生命倫理
B・バトラー	新約聖書のマリア	41	1976 22～31	マリア論
M・ーD・シュニユ	労働のキリスト教的意味	41	1976 32～45	キリスト教的社會思想
J・フットレル	創立者のカリスマ発見	41	1976 46～53	修道生活
A・ロツェッター	フランシスコの現代への示唆	41	1976 54～59	霊性一般
J・ティヤール	変革が必要な修道生活	41	1976 60～74	修道生活
J・ラデルマーケス	復活したキリストを宣教する〈2〉	41	1976 75～78	復活
早副稔	〈巻頭言〉自らの信仰体験を整理して語れるものを持ちたい	42	1977 2～3	巻頭言
J・ラッツインガー	洗礼と信仰および教会所属	42	1977 4～17	洗礼
J・G・ソボサン	神秘主義の道	42	1977 18～24	神秘主義
H・スタッファー	改宗者は霊的独自性を捨てるのか —アジアの伝統的宗教とカトリックとの関係—	42	1977 25～30	諸宗教の神学
H=J・クラウス	捕囚帰還後の律法理解	42	1977 31～44	旧約聖書神学
C・P・マイヤー	神とその「可視性」 —神学における神体験と神認識について—	42	1977 45～51	神概念
J・M・ロビラ	今日の〈赦しの秘跡〉	42	1977 52～61	ゆるし
D・ディドベール／P・M・ベールネール	イエスはガリラヤにきた —マルコ1章21～45の解釈—	42	1977 62～68	マルコ
J・デュボン	至福について	42	1977 69～79	新約聖書神学
高柳俊一	〈巻頭言〉神学の未来？	43	1977 2～3	巻頭言
Y・コンガール	教導職と神学者	43	1977 4～11	教導職
J・カーモディ	カトリック神学の今後の課題	43	1977 12～21	諸宗教の神学
西独カトリック教会会議	われわれの希望 —現代の信仰告白—	43	1977 22～36	教会論一般
K・ヘンメルレ	宣教の火を消すな	43	1977 37～41	福音宣教
W・カスパー	伝承と自由	43	1977 42～46	聖書と伝承
M・ウォルシュ	聴けイスラエル(申命記 その1)	43	1977 47～51	申命記
C・J・パイファー	刷新の青写真(申命記 その2)	43	1977 52～57	申命記
L・ドゥーハン	イエスと祈り	43	1977 58～63	祈り
D・ヒル	I ペトロ書における苦しみと洗礼	43	1977 64～71	I ペトロ書
J・M・ティヤール	信仰に生きる修道者	43	1977 72～80	修道生活
赤波江春海	〈巻頭言〉道—真理—命	44	1978 2～3	巻頭言
P・アルペ	飢餓と福音宣教	44	1978 4～15	福音宣教
W・カスパー	「神の子」の理解について	44	1978 16～28	神の子
Y・ラガン	祈りの技術	44	1978 29～35	祈り
P・G・ファン・ブレーメン	受容を受け入れる勇氣	44	1978 36～40	信仰生活
K・ラーナー	熱狂と修道者	44	1978 41～43	聖霊
『プロ・ムンディ・ヴィタ』	カトリック教会のペンテコスタリズム(1)	44	1978 44～54	聖霊
J・アルファロ	死とキリスト教的希望	44	1978 55～65	終末論
R・F・コリンズ	イエスとニコデモとの会話	44	1978 66～73	新約聖書神学
I・de ラ・ポトリ	真理を行う	44	1978 74～80	新約聖書神学
押田成人	〈巻頭言〉安物買いのぜに失い	45	1978 2～3	巻頭言

総目録

Z・アルセギ	ゆるしの祭儀の刷新	45	1978 4~10	ゆるし
J・モルトマン	三一的神の歴史	45	1978 11~23	三位一体論
L・A・シエケル	イヨブ記を戯曲的に読むために	45	1978 24~35	ヨブ
P・ベルナディーク	ルカ福音書における旅行記の霊性	45	1978 36~46	ルカ
K・シエルクレ	ヨハネス福音書における教会	45	1978 47~53	ヨハネ
『プロ・ムンディ・ヴィタ』	カトリック教会のペンテコスタリズム(2)	45	1978 54~62	聖霊
J・スードブラック	患難のうちにも誇る	45	1978 63~71	信仰生活
J・M・カスティリヨ	社会と霊的生活のずれ	45	1978 72~79	霊性神学
渡辺和子	〈巻頭言〉「君は君、我は我なり、されど仲良き」	46	1979 2~3	巻頭言
H・ミューレン	マリア論の新しい動向	46	1979 4~11	マリア論
W・バイナート	今日のマリア崇敬	46	1979 12~24	マリア論
C・フォカン	マルコス福音書における弟子たちの盲目性	46	1979 25~29	マルコ
M・A・ゲッティ	ローマ書における使徒パウロス —今日の教会へのメッセージ—	46	1979 30~36	ローマ書
F・ムスナー	「ガリラヤ危機」というものはあったか	46	1979 37~46	キリスト論
J・ツインク	門	46	1979 47	エッセイ
J・ギエ	イエス・キリストの中になされた経験	46	1979 48~54	キリスト論
V・コディナ	場末に息づく信仰	46	1979 55~61	神学的エッセイ
H・ゲルツ	テロリズムの原因	46	1979 62~64	キリスト教的社会思想
J・パスキエ	体験と回心	46	1979 65~72	信仰生活
J・M・カスティリヨ	新しい奉仕職の確立	46	1979 73~78	教会論一般
三好迪	〈巻頭言〉聖書研究と教理神学	47	1979 2~3	巻頭言
D・シニア	イエスとはだれか —現代キリスト論の課題—	47	1979 4~15	キリスト論
W・ケルン	「共に食事すること」	47	1979 16~23	キリスト論
G・ローフィンク	神学における「物語り」 —福音書の言語上の基本構造—	47	1979 24~35	新約聖書神学
K・ラーナー	意味への問い —神の全き秘義に人生の意味を問う—	47	1979 36~43	神学的エッセイ
K・ヘムメルレ	忙しさとクリスマス	47	1979 44~46	エッセイ
N・ローフィンク	安息と余暇	47	1979 47~58	旧約聖書神学
P・ヒューナーマン	イエスの力と無力	47	1979 59~65	キリスト論
I・de ラ・ボトリ	イエスとサマリア人	47	1979 66~79	ヨハネ
和田幹男	〈巻頭言〉日本のカトリック神学を考える	48	1980 2~3	巻頭言
プエブラ司教会議	福音宣教	48	1980 4~11	福音宣教
O・v・ネル・プロイニング	世界に対する教会の使命	48	1980 12~25	教会論一般
S・ガリレア	解放の神学	48	1980 26~48	解放の神学
R・ペツシュ	ペトロスによるメシア告白	48	1980 49~56	マルコ
G・オーコリンズ	イエスは自らの死をどのように理解したか	48	1980 57~68	キリスト論
U・ヴィルケンス	聖餐と教会一致	48	1980 69~86	エキュメニズム
J・マクポリン	ルカとヨハネスにおける聖霊	48	1980 87~104	聖霊
K・シェーファー	祈りの意味	48	1980 105~112	祈り
池長潤	〈巻頭言〉源泉としての信仰体験	49	1980 2~3	巻頭言
G・グレースハーケ	神の愛に召されている人間	49	1980 4~24	三位一体論
O・H・ペツシュ	死と信仰	49	1980 25~48	終末論
G・スヴィテク	共同体の霊動弁別	49	1980 49~60	イエズス会霊性
R・ローランタン	「カリスマ」とは何か	49	1980 61~71	聖霊

総目録

P・シュミッツ	良心 —危機に立たされる倫理規範—	49	1980 72~85	倫理神学一般
J・ボイトラー	新約聖書による霊的指導	49	1980 86~98	霊的指導
W・ヴォーゲルス	「構造分析」と司牧 —ザカイオスの物語—	49	1980 99~112	聖書釈義学
白柳誠一	〈巻頭言〉真理に仕える使命	50	1981 2~3	巻頭言
P・アルペ	〈巻頭言〉愛と正義	50	1981 4~9	巻頭言
J・ピタウ	〈巻頭言〉日本への巡礼	50	1981 10~11	巻頭言
越前喜六	〈巻頭言〉神学の日本化を目指して	50	1981 12~13	巻頭言
M・トーレス=アルピ	〈巻頭言〉牧者なる主の声	50	1981 14~16	巻頭言
熊沢義宣	エキュメニズムに関する二、三の考察	50	1981 17~19	エキュメニズム
J・モルトマン	不安の時代におけるキリスト	50	1981 20~34	終末論
P・ヒューナーマン	教会と聖職	50	1981 35~49	位階制
R・ブーシェー	「明日の司教とは」	50	1981 50~61	司教職
J・P・ハイル	マタイオス福音書における癒しの奇跡	50	1981 62~77	マタイ
J・ボーツ／P・D・フリース	霊的指導を与えるときの原則	50	1981 78~79	霊的指導
J・ダルク	賛美のいけにえ	50	1981 80~85	祈り
M・サイモン	礼拝のための空間づくり	50	1981 86~98	司牧
山本襄治	〈巻頭言〉神学する心	51	1981 2~3	巻頭言
K・ラーナー	「世界の教会」への飛躍	51	1981 4~15	教会論一般
H・U・v・バルタザール	とらえがたきものに頼る	51	1981 16~32	信仰
A・ジョルジュ	救い主の誕生 —ルカスによる誕生物語の研究—	51	1981 33~50	ルカ
D・バール	ドラマとしてのマタイオス福音書 —その構造と意図の再考察—	51	1981 51~60	マタイ
C・ラッシュ／G・ルヴェーク／L・デュポン	ヨハネス20章の構造	51	1981 61~76	ヨハネ
J・ラムブレヒト	共観福音書における〈たとえ話〉	51	1981 77~92	新約聖書神学
J・ラッツィンガー	肉体の復活	51	1981 93~109	終末論
粟本昭夫	〈巻頭言〉日本の教育とキリスト教神学	52	1982 2~3	巻頭言
J・ソプリノ	歴史上のイエスと信仰のキリスト(前半)	52	1982 4~27	キリスト論
C・バンベルク	現代人と礼拝	52	1982 28~41	典礼神学
L・A・シェーケル	回心の典礼 —詩編50と51に見る	52	1982 42~49	詩編
H・U・v・バルタザール	新約聖書から見た召命	52	1982 50~60	召命
H・ロッター	救いと性の倫理	52	1982 61~73	性倫理
G・オホマニー	秘跡・典礼の新しい理解 —洗礼・ゆるし・病者の塗油の秘跡をめぐって	52	1982 74~84	洗礼
M・T・ウィンスタンリー	弟子の道と孤独 —マルコス福音書を黙想して—	52	1982 85~94	受難
K・ラーナー	イエスの復活	52	1982 95~112	復活
赤木善光	〈巻頭言〉典礼への関心	53	1982 2~4	巻頭言
J・ソプリノ	歴史上のイエスと信仰のキリスト(後半)	53	1982 5~24	キリスト論
T・キーティング	集中の祈り	53	1982 25~33	祈り
E・ウッドワード	修道生活と憂鬱症	53	1982 34~68	修道生活
H・U・v・バルタザール	少年の召命	53	1982 69~71	召命
L・A・シェーケル	神の不在 —詩編42・43の詩的構造—	53	1982 72~81	詩編
N・ローフィンク	「生めよ、ふえよ、地を従わせよ」?	53	1982 82~100	旧約聖書神学
J・ホホワイトヘッド	「今の時をよく用いなさい」	53	1982 101~103	信仰生活
P・スラルダース	創造	53	1982 104~112	サクラメントウム・ムンディ
宇佐美公史	〈巻頭言〉波のはざままで	54	1983 2~5	巻頭言

J・モルトマン	テレジアとルター	54	1983 6～25	マルティン・ルター
P・ジェルヴェ	ゆるしの秘跡	54	1983 26～45	ゆるし
W・ケルン	キリスト者は保守的か	54	1983 46～61	キリスト論
M・A・シュヴァリエ	聖霊の降臨 —ルカスとヨハネスにおいて—	54	1983 62～71	聖霊
K・ドノヴァン	典礼の逆説	54	1983 72～78	典礼一般
G・マルク	カトリック教会の未来(一)	54	1983 79～102	教会論一般
K・ラーナー	原罪	54	1983 103～112	原罪
徳善義和	〈巻頭言〉賞讃と忘却のはざまのルター	55	1983 2～4	巻頭言
K・ラーナー	霊の体験	55	1983 5～23	神体験
M・スコット	預言者エリヤと神の出会い	55	1983 24～29	修道生活
F・ロンバルディ	核エネルギーの倫理的次元	55	1983 30～35	社会倫理
W・クラフト	マスターベーション・性の考察	55	1983 36～45	性倫理
H・ワンズブラ	聖書における平和	55	1983 46～53	聖書神学一般
G・オマホーニ	死後への不安と願望	55	1983 54～62	終末論
S・M・シュナイダース	ヨハネス福音書と女性像	55	1983 63～81	ヨハネ
G・マルク	カトリック教会の未来(二) —教会が直面する七つの挑戦—	55	1983 82～99	教会論一般
K・ラーナー	あがない	55	1983 100～112	サクラメントウム・ムンディ
沢田和夫	〈巻頭言〉一致志向の霊性	56	1984 2～4	巻頭言
E・スキレバークス	核非武装論 —平和の福音を生きる—	56	1984 5～16	信仰生活
F・ドレフェス	神のことばに仕える教会	56	1984 17～28	聖書釈義学
F・ドレフェス	神のことばの現実化	56	1984 29～42	聖書釈義学
R・ガスペリス	神のことばを祈る	56	1984 43～54	聖書釈義学
W・ウォーカー	ヨハネスによる「主の祈り」?	56	1984 54～66	新約聖書神学
H・ファイフェル	ホスピス —死は人間性の破壊か—	56	1984 67～72	司牧
W・レーザー	ルター像の変遷	56	1984 73～84	マルティン・ルター
J・ブロセーダー	新しい出会い〈カトリックのルター受容〉	56	1984 85～94	マルティン・ルター
堀江節郎	新しい神学	56	1984 95～96	神学的エッセイ
H・J・ポットマイヤー	信徒による司牧的奉仕	56	1984 97～104	信徒使徒職
E・ニールマン	司祭	56	1984 105～111	司祭職
百瀬文晃	〈巻頭言〉教会への奉仕としての神学	57	1984 2～4	巻頭言
岩島忠彦	カール・ラーナー —人と思想—	57	1984 5～14	カール・ラーナー
K・ラーナー	〈神秘〉概念の再吟味	57	1984 15～41	基礎神学一般
K・ラーナー	三位一体に関する考察	57	1984 42～60	三位一体論
K・ラーナー	イエスの人性について	57	1984 61～72	キリスト論
J・B・メッツ	カール・ラーナー —ひとつの神学的生涯—	57	1984 73～86	カール・ラーナー
K・ラーナー	日常に生きる永遠 —カール・ラーナー抜粋集—	57	1984 87～114	カール・ラーナー
K・ラーナー	死	57	1984 115～121	サクラメントウム・ムンディ
神学ダイジェスト編集室	カール・ラーナー主要文献リスト(邦語)	57	1984 122～128	カール・ラーナー
森一弘	〈巻頭言〉よろこびのこだまとしての福音宣教	58	1985 2～4	巻頭言
J・モルトマン	父なる神を信ず—神についての家父長的話法か、非家父長的話法か—	58	1985 5～16	フェミニスト神学
J・ラッツィンガー	解放の神学批判	58	1985 17～26	解放の神学
J・セグンド	解放の神学に見る二つの流れ	58	1985 27～37	解放の神学
P・デーゼラース	民の癒し手、ヤーウェ —トビア書に見る聖書の救済論—	58	1985 38～47	トビト記

総目録

J・フィッツ	モーセ、今求められる指導者像	58	1985 48～50	神学的エッセイ
J・F・オグレイディ	主に愛された弟子	58	1985 51～60	ヨハネ
C・E・カラン	規範的倫理から司牧的配慮へ	58	1985 61～74	司牧
J・パリシ／R・クランフォード	脳死—生と死のはざま—	58	1985 75～85	生命倫理
H・ロッター	教会法の枠組みと再婚の現実	58	1985 86～94	婚姻
J・シュヴァルツ	聖座の外交関係	58	1985 95～103	教皇庁関係
フュークリスター	過越し	58	1985 104～112	サクラメントウム・ムンディ
橋口倫介	〈巻頭言〉福音の文化的受容への期待	59	1985 2～4	巻頭言
A・ダレス	カトリシズムの本質 —プロテスタントとカトリックの観点をめぐって—	59	1985 5～25	カトリシズム
W・カスパー	救いの普遍的秘跡たる教会	59	1985 26～44	教会論一般
M・デュメ	信仰と文化との出会い	59	1985 45～56	インカルチュレーション
J・R・ダナヒュー	平和の福音 —ルカ福音書釈義—	59	1985 57～68	ルカ
W・ヴォーゲルス	ヨブの霊的成長	59	1985 69～76	ヨブ
M・J・バックレー	弱さを身に負うがゆえに	59	1985 77～83	司祭職
N・ローフィンク	世における正義と司祭職	59	1985 84～98	司祭職
F・レンツェンダイス	福音書という文学	59	1985 99～107	聖書釈義学
W・プロイニング	聖徒の交わり	59	1985 108～112	サクラメントウム・ムンディ
犬飼道子	〈巻頭言〉信徒使徒職 —一、二の考察—	60	1986 2～4	巻頭言
G・ローフィンク	イエスの非暴力要求	60	1986 5～23	マタイ
A・ニコラス	聖書の読み方と祈り	60	1986 24～40	聖書神学一般
宇佐美公史	今日聖書をいかに読むか	60	1986 41～50	聖書神学一般
C・マルティーニ	最初の弟子たち	60	1986 51～55	祈り
M・P・ギャラガー	「教会離れ」と司牧の実践	60	1986 56～65	司牧
E・A・ディードリック	典礼改革に見る聖体の秘跡	60	1986 66～81	聖体
T・A・ケイン	精神療法 —心のいやし—	60	1986 82～89	司牧
K・シューベルト	イエスの復活 —そのユダヤ教的観点—	60	1986 90～101	復活
E・ニールマン	信徒	60	1986 102～108	サクラメントウム・ムンディ
F・アリンゼ	〈巻頭言〉諸宗教との対話の可能性を求めて	61	1986 2～6	巻頭言
K・シャッツ	公会議後の教会の危機	61	1986 7～18	教会論一般
M・アマラドス	対話は宣教と両立するか	61	1986 19～28	諸宗教の神学
P・ニッター	キリスト教は真にして絶対の宗教か	61	1986 39～51	諸宗教の神学
S・ドゥクルー	修道生活における対神関係	61	1986 52～62	修道生活
J・カヴァノー	資本主義文化とキリスト者	61	1986 63～72	信仰生活
R・マッコーミック	「生かすべきか、死なすべきか」	61	1986 73～83	生命倫理
J・オドネル	聖霊の神学 —イエスと霊—	61	1986 84～103	聖霊
K・ラーナー	キリストの再臨	61	1986 104～112	サクラメントウム・ムンディ
M・P・ギャラガー	〈巻頭言〉無神論の多様性を理解する	62	1987 2～4	巻頭言
J・フィッツマイヤー	キリストの昇天と聖霊降臨	62	1987 5～25	新約聖書神学
R・ロンマースキルヒ	最後の修道院	62	1987 26～35	修道生活
F・F・クラヴェール	教会と革命	62	1987 36～48	アジアの教会
R・プツァ	教会における再婚者の復権	62	1987 49～56	婚姻
K・ケリー	良心の成熟を目指して	62	1987 57～69	信仰生活
M・R・ソーズ	パウロの手紙における「神の義」	62	1987 70～79	パウロ神学

総目録

P・D・ハンソン	旧約聖書における戦争と平和	62	1987 80～99	旧約聖書神学
M・ゼックラー	啓蒙と啓示の相互依存	62	1987 100～106	啓示
R・シュルテ	秘跡(1)	62	1987 107～112	サクラメントウム・ムンディ
長島世津子	〈巻頭言〉教会と信徒の行方	63	1987 2～5	巻頭言
R・E・ブラウン	聖書的な祭司職の要請	63	1987 6～15	司祭職
C・デュコック	信仰の活動的な主体である信徒	63	1987 16～25	信徒使徒職
H・J・クラウク	役職のない共同体—ヨハネ文書における教会の経験	63	1987 26～48	教会論一般
G・キーレンケリイ	新約聖書における信徒の役割	63	1987 49～57	信徒使徒職
S・J・エマヌエル	アジアの教会における信徒	63	1987 58～72	アジアの教会
K・ラーナー	成熟したキリスト者とは	63	1987 73～84	信仰生活
カルメル会	心の旅 —捕らわれの記録—	63	1987 85～95	エッセイ
L・ギツリック	見えることと見えないこと	63	1987 96～104	祈り
R・シュルテ	秘跡(2)	63	1987 105～112	サクラメントウム・ムンディ
岸千年	〈巻頭言〉聖書を起点として	64	1988 2～6	巻頭言
J・H・ライト	教会 —聖霊の共同体—	64	1988 7～25	教会論一般
J・オコーリンズ	キリストの復活	64	1988 26～32	復活
K・H・シェルクレ	実存的解釈における非神話化	64	1988 33～43	聖書釈義学
F・リンチ	アナムカラ —一致の祈りと説教への招き—	64	1988 44～54	祈り
N・ローフィンク	神の治療処置である修道会	64	1988 55～67	修道生活
L・D・デイヴィス	この世の子らから学ぶ	64	1988 68～76	エッセイ
A・ジョーンズ	イスラム教 —キリスト教への挑戦—	64	1988 77～86	イスラム教
J・ダルリムプル	平和でなく剣を	64	1988 87～94	福音宣教
J・ズートブラック	ベタニアの兄妹たち	64	1988 95～103	祈り
H・フリース/J・フィンスタヘルツル	無謬性	64	1988 104～112	サクラメントウム・ムンディ
野間順子	〈巻頭言・全世界に行って〉ブルキナ・ファソの兄弟と共に生きる	65	1988 2～6	巻頭言
W・バイネールト	聖人 —キリストの救いの体現者—	65	1988 7～22	聖人
R・E・ブラウン	現代における聖書と教義の関係	65	1988 23～29	聖書釈義学
R・マーレイ	預言・政治・司祭職	65	1988 30～43	司祭職
W・カスパー	世界における信徒の使命	65	1988 44～58	信徒使徒職
A・ニコラス	教会・宣教・キリスト者の生活(Ⅰ)	65	1988 59～74	教会論一般
O・v・ネル・ブロイニング	制度化された不正とは何か	65	1988 75～80	罪
I・カマーチョ	〈教会の社会教説〉を解釈するための四つの鍵	65	1988 81～96	キリスト教的社会思想
H・グロース	「主は豊かなあがないに満ち」	65	1988 97～105	旧約聖書神学
J・シュプレット	「肉体」と「霊魂」	65	1988 106～111	サクラメントウム・ムンディ
A・フェークトレ/I・マイシュ	イエス・キリスト(Ⅰ)	66	1989 100～111	サクラメントウム・ムンディ
K・リーゼンフォーバー	〈巻頭言〉現代に神を語る	66	1989 2～5	巻頭言
J・ブエリエ	連帯する神の民	66	1989 6～22	旧約聖書神学
金 壽煥(キム・スファン)	聖体大会にむけて	66	1989 23～31	聖体
金 勝恵(キム・スンヘー)	解放とインカルチュレーション	66	1989 32～39	インカルチュレーション
P・バック	聖書と教会における預言(Ⅰ)	66	1989 40～49	旧約聖書神学
T・E・クラーク	貧しい人々の側に立つ選択	66	1989 50～59	キリスト教的社会思想
L・S・ケーヘル	山上の説教の倫理的な意味	66	1989 60～69	倫理神学一般
A・ピエリス	解放の視点からみた霊性	66	1989 70～82	霊性神学

A・ニコラス	教会・宣教・キリスト者の生活(Ⅱ)	66	1989 83~99	解放の神学
伊従直子	〈巻頭言〉「神の似姿」に創られ	67	1989 2~4	巻頭言
H・S=シュトラウマン	母なる神 —ホセア11章に表れた神のイメージ—	67	1989 5~20	ホセア
P・バック	聖書と教会における預言(Ⅱ)	67	1989 21~31	新約聖書神学
R・ブレナン	民衆の神学とは	67	1989 32~40	民衆の神学
U・アダムス	社会の周辺から	67	1989 41~55	祈り
N・グライナツハー	離婚と再婚の問題	67	1989 56~65	婚姻
A・ピエリス	仏教とキリスト教(Ⅰ)	67	1989 66~82	諸宗教の神学
P・ワーグドルフ	祈りの手引き	67	1989 83~91	祈り
J・モルトマン	イエスと神の国	67	1989 92~105	神の国
A・フェークトレノ/I・マイシュ	イエス・キリスト(Ⅱ)	67	1989 106~112	サクラメントウム・ムンディ
雨宮慧	〈巻頭言〉求心的な動き	68	1990 2~4	巻頭言
J・オウデンネル	司祭のアイデンティティーと霊性	68	1990 5~16	司祭職
R・ヒューブナー	初代教会における執事・長老・監督職の起源	68	1990 17~35	位階制
M・ハルト	教皇制度と教会一致運動	68	1990 36~50	教皇職
J・I・ゴンザレス・ファウス	ペトロの誘惑	68	1990 51~61	祈り
S・パイナダス	真の解放 —観想と活動—	68	1990 62~75	祈り
J・J・ギル	イメージの召命論	68	1990 76~82	召命
A・ピエリス	仏教とキリスト教(Ⅱ)	68	1990 83~95	諸宗教の神学
J・モルトマン	キリストの復活と世界の希望	68	1990 96~106	復活
K・ラーナー	イエス・キリスト(Ⅲ)	68	1990 107~112	サクラメントウム・ムンディ
佐藤敬一	〈巻頭言〉神様に喜んでいただくために	69	1990 2~5	巻頭言
P・H・コルベンバツハ	〈巻頭言〉二十五周年を祝って	69	1990 6~7	巻頭言
田淵文男	〈巻頭言〉『神学ダイジェスト』の四半世紀と若干の具体案	69	1990 8~10	巻頭言
J・B・メッツ	公会議 —「一つの手始めの手始め」?—	69	1990 11~22	教会論一般
岩島忠彦	イエスの姿を求めて	69	1990 23~41	キリスト論
P・M・ツレーナー	教会のヴィジョン	69	1990 42~50	教会論一般
N・ギルメット	聖パウロと女性	69	1990 51~63	パウロ神学
T・P・ローシュ	倫理の諸問題とエキュメニズム	69	1990 64~69	エキュメニズム
R・グラムリッヒ	「不偏心」とイスラム教	69	1990 70~77	イスラム教
M・サール	堅信を巡る現在の状況	69	1990 78~90	堅信
R・マレー	霊的友情	69	1990 91~105	霊性神学
K・ラーナー	イエス・キリスト(Ⅳ)	69	1990 106~112	サクラメントウム・ムンディ
鈴木宣明	〈巻頭言〉イグナティウスの霊性の歴史体験	70	1991 2~5	霊性神学
A・デムステイエ	最初のイエズス会員たちと貧しい人々	70	1991 6~17	イエズス会霊性
J・ソプリノ	『靈操』におけるキリスト	70	1991 18~37	イエズス会霊性
M・ヘルヴィヒ	王たるキリストの招き	70	1991 37~44	イエズス会霊性
E・クンツ	神の愛に動かされて —イグナチオの靈操の神学的諸観点とイエズス会員の行動様式の特	70	1991 45~61	イエズス会霊性
R・J・シュライター	二十一世紀に向かう宣教	70	1991 62~72	福音宣教
A・ヴァイザー	病気をいやす賜物 —イエスと病人たち—	70	1991 73~81	新約聖書神学
H・シュペーマン	イエスの受難	70	1991 82~87	祈り
B・F・バット	眠っている神 —古代中近東の神話と聖書思想—	70	1991 88~105	旧約聖書神学
K・ラーナー	イエス・キリスト(Ⅴ)	70	1991 106~112	サクラメントウム・ムンディ

総目録

岳野慶作	〈巻頭言〉『レーラム・ノヴァルム』発布百周年	71	1991 2~5	巻頭言
R・M・サンス・デ・ディエゴ	教会の社会教説 —百年と二十五年—	71	1991 6~19	キリスト教的社会思想
F・ルイス	十字架の聖ヨハネの霊性の主要側面	71	1991 20~29	霊性一般
R・キナスト	生活の場で行う霊操	71	1991 30~35	イエズス会霊性
S・クロイツァー	「母なる神」の再検討	71	1991 36~44	旧約聖書神学
A・ハント	他宗教に救いはないのか? —諸宗教神学の可能性—	71	1991 45~55	諸宗教の神学
K・ヘルツォーク	女性と戦争と平和	71	1991 56~73	フェミニスト神学
L・ブレンダン	天におけるごとく地にも(1)	71	1991 74~82	信仰生活
J・A・コールマン	世俗 —その社会学的考察—	71	1991 83~90	セキュラリズム
D・E・メイヤー	修道院会計の見直し	71	1991 91~95	修道生活
Q・R・コナーズ	修道者養成における危機の役割	71	1991 96~101	修道生活
K・ラーナー	イエス・キリスト(VI)	71	1991 102~112	サクラメントウム・ムンディ
緒方貞子	〈巻頭言〉難民の保護	72	1992 2~3	難民
M・E・ポアリング	物語としてのキリスト論 —マルコのキリスト理解—	72	1992 4~24	マルコ
D・ランギス	喜び —その聖書的、教父的理解—	72	1992 25~35	霊性一般
O・ケーラー	フランシスコ・ザビエル —使命感に燃えたイエズス会の個人主義者—	72	1992 36~55	イエズス会霊性
E・ハンク	アウシュビッツ後のキリスト者	72	1992 56~64	現代と神学
E・ショッケンホフ	人間の尊厳とその生物学的な自然本性	72	1992 65~79	生命倫理
ブラザー・アンドルー	カリスマと委員会	72	1992 80~82	福音宣教
L・A・シェーケル	「さからい」としての良心 —エレミヤ書からの聖書的考察—	72	1992 83~92	旧約聖書神学
L・ブレンダン	天におけるごとく地にも(2)	72	1992 93~101	信仰生活
P・ネメシエギ	人間の神学者(アンリ・ド・リュバク追悼)	72	1992 102~105	エッセイ
J・J・プテンカラム	難民問題の解説 —私の存在の証明書—	72	1992 106~111	エッセイ
小高毅	〈巻頭言〉無知と学知	73	1992 2~4	巻頭言
J・アリソン	義化と意識の構造	73	1992 5~19	パウロ神学
R・L・マドックス	実践的学びとしての神学の回復	73	1992 20~41	実践神学一般
S・J・ダフィー	心の闇(Ⅰ)—問い直される原罪—	73	1992 42~56	原罪
S・グライナー	祈りは必ずかなえられるのか?	73	1992 57~71	祈り
W・ヴォルベルト	他人の体に対する権利? —臓器移植の若干の問題について—	73	1992 72~88	生命倫理
R・A・ヒル	霊的指導者の守秘義務	73	1992 89~94	霊的指導
J・オーコンネル	愛の理論	73	1992 95~103	霊性一般
J・B・メッツ	政治神学	73	1992 104~111	サクラメントウム・ムンディ
長島正	〈巻頭言〉待望される地球・家族・共同体の神学	74	1993 2~5	エコロジー
J・M・デ・メサ	キリストに従う道としての結婚	74	1993 6~25	婚姻
P・A・ファウルクス	聖書における家庭のイメージ	74	1993 26~36	婚姻
M・E・スカーフ	家庭の神話とモデル	74	1993 37~49	婚姻
J・デュピュイ	キリスト論と諸宗教における救いの神学	74	1993 50~61	諸宗教の神学
S・J・ダフィー	心の闇(Ⅱ)—問い直される原罪—	74	1993 62~76	原罪
C・M・マルティニーニ	聖書による祈り	74	1993 77~85	祈り
S・ラヤン	地球は神のもの	74	1993 86~102	エコロジー
J・ダーフィット	家庭	74	1993 103~111	サクラメントウム・ムンディ
野村純一	〈巻頭言〉福音宣教推進全国会議の神学	75	1993 2~4	福音宣教
R・A・マッコーマック	二十一世紀に臨む倫理神学 —変動の中の伝統—	75	1993 5~18	倫理神学一般

総目録

U・ルー	新カテキズム	75	1993 19~28	カテキズム
M・レナ	テゼ	75	1993 29~41	霊性一般
R・ホートン	忍耐の神学 —燃えつき症候群を越えて—	75	1993 42~53	現代と神学
M・A・マクファースン・オリヴァー	夫婦の霊性	75	1993 54~69	霊性一般
L・シューマン	召し出しの霊的識別 —イグナチオ・デ・ロヨラの霊操にもとづく方法—	75	1993 70~83	イエズス会霊性
H・テシエ	イスラームから問われるキリスト者 —キリスト者によるイスラーム理解—	75	1993 84~103	イスラーム教
K・ラーナー	神の普遍的救済意志	75	1993 104~111	サクラメントウム・ムンディ
K・リーゼンフーバー	〈巻頭言〉神学的思惟の諸源泉	76	1994 2~5	神学一般
A・ダレス	教会論一般の半世紀	76	1994 6~28	教会論一般
H・フリース	受容 —教会における真理発見への信徒の貢献—	76	1994 29~45	教会論一般
A・ペーター	バルトロメ・デ・ラス・カサス —解放の神学における回心の範型—	76	1994 46~58	解放の神学
G・A・アーバックル	民族性・多文化主義・文化的受肉	76	1994 59~71	インカルチュレーション
M・アマラドス	解放 —諸宗教の協力をめざして—	76	1994 72~93	諸宗教の神学
J・B・メッツ	カール・ラーナー追惜	76	1994 94~99	エッセイ
K・ラーナー	一九九九年、イエズス会修練院にて	76	1994 100~101	エッセイ
K・ラーナー	神の民・教会所属	76	1994 102~110	サクラメントウム・ムンディ
小田武彦	〈巻頭言〉分かち合いの前提となるもの	77	1994 2~5	巻頭言
W・カスパー	聖書と伝統 —一つの聖霊論的展望—	77	1994 6~34	聖書と伝承
K・H・ヴェーガー	現代の神証明の構造	77	1994 35~44	基礎神学一般
W・キルヒシュレーガー	エウカリスチア —共同体の祝祭としての感謝の祭儀—	77	1994 45~52	聖体
M・L・ブラン	霊的同伴の実践	77	1994 53~59	霊的指導
W・ランベルト	「霊操を与える者」 —霊操における同伴者の役割—	77	1994 60~71	イエズス会霊性
A・ピエリス	アジアのキリスト	77	1994 72~85	アジアの神学
D・ミュレール	旅する者の祖国 —移住の倫理のために—	77	1994 86~101	社会倫理
A・グリルマイアー	キリスト論	77	1994 102~113	サクラメントウム・ムンディ
白柳誠一	〈巻頭言〉センスス・エクレシエ	78	1995 2~3	巻頭言
A・ダレス	『霊操』の教会規定	78	1995 4~17	イエズス会霊性
P・レクリヴァン	改革者イグナチオ? —『霊操』の教会規定の歴史的読解—	78	1995 18~31	イエズス会霊性
J・G・ゲルハルツ	教会の感覚 —イグナチオ・デ・ロヨラの教会性—	78	1995 32~45	イエズス会霊性
J・クレマー	イエスの根本願望 —イエスが本来望んだこと、今日も望んでいること—	78	1995 46~65	キリスト論
M・ジュリアーニ	霊の動き	78	1995 66~77	イエズス会霊性
E・コレット	ラーナー神学の哲学的基礎	78	1995 78~90	カール・ラーナー
J・B・メッツ	カール・ラーナー —人間の神学的名誉のための闘い—	78	1995 91~102	カール・ラーナー
K・ラーナー	神学	78	1995 103~115	サクラメントウム・ムンディ
濱尾文郎	〈巻頭言〉「時のしるし」を読みとる	79	1995 2~6	巻頭言
N・グライナツハー	新時代におけるカトリックの同一性	79	1995 7~18	教会論一般
A・クノックアールト	カトリック教会カテキズム	79	1995 19~33	カテキズム
E・ファイル	『新カテキズム』は信仰を正しく伝えうるか?	79	1995 34~50	カテキズム
R・ヘイト	今日に伝えるイエス	79	1995 51~74	キリスト論
J・W・オマリー	イグナチオは教会の改革者か?	79	1995 75~92	イエズス会霊性
J・バーナーディン	司祭 —秘義の担い手・魂の医者—	79	1995 93~103	司祭職
M・L・グーブラー	私は道・真理・命	79	1995 104~113	新約聖書神学
K・ベルガー	聖書釈義学と組織神学	79	1995 114~125	聖書釈義学

総目録

F・ケルスティエンス	希望	79	1995 126～135	サクラメントウム・ムンディ
田邊董	〈巻頭言〉観想への招き	80	1996 2～5	霊性神学
W・バイネルト	大学神学部と教会	80	1996 6～24	神学教育
M・デルガド	岐路に立つヨーロッパ神学	80	1996 25～38	インカルチュレーション
K・ブラーゼル	多文化的キリスト教・解放のための構想	80	1996 39～55	インカルチュレーション
V・ティリマンナ	国家主権と人道的介入	80	1996 56～71	社会倫理
E・グシキンデ	イエスとサマリア人 ―対話の範型―	80	1996 72～77	福音宣教
J・W・オマリー	ミッションと初期イエズス会員	80	1996 78～86	イエズス会霊性
M・ジュリアーニ	霊操におけるスーパーバイザーとは	80	1996 87～92	イエズス会霊性
J・R・サックス	イグナチオのミスティシズム	80	1996 93～103	イエズス会霊性
K・ラーナー	教導職	80	1996 104～117	サクラメントウム・ムンディ
徳善義和	〈巻頭言〉現代の教会への共通の問い ―ルター没後四五〇年に「九十五箇条」を読む―	81	1996 2～6	巻頭言
M・ズイーヴェルニヒ	宣教の方向転換 ―宣教の歴史の実績と将来の課題―	81	1996 7～21	福音宣教
M・ゼックラー	信教の自由と寛容	81	1996 22～41	エキュメニズム
A・ピエリス	諸宗教間対話と諸宗教の神学 ―アジアのパラダイム―	81	1996 42～51	諸宗教の神学
J・レーザー	「ルターの年」とエキュメニズム	81	1996 52～57	エキュメニズム
V・P・ファーニッシュ	パウロを位置づける ―よりよい理解に向けて―	81	1996 58～68	パウロ神学
L・ポフ	解放の神学とエコロジー ―分立か互恵か?―	81	1996 69～79	解放の神学
J・ライター	遺伝子治療と倫理	81	1996 80～88	生命倫理
P=H・コルベンバッハ	イエズス会員の派遣と信徒との協力	81	1996 89～95	イエズス会霊性
M・ジュリアーニ	《連載・イグナチオの霊操 第二回》「第一週」の経験の中でのキリスト	81	1996 96～102	イエズス会霊性
P・マインホルト	プロテスタンティズム	81	1996 103～115	サクラメントウム・ムンディ
青木清	〈巻頭言〉科学と宗教の対話への期待	82	1997 2～5	自然科学と神学
R・A・マッコーマック	回勅『いのちの福音』を読む	82	1997 6～18	回勅
J・フックス	「いのちの福音」と死の文化	82	1997 19～33	回勅
R・A・マッコーマック	正・不正から善・悪へ ―識別は倫理的問題に何を寄与するか―	82	1997 34～48	倫理神学一般
N・グライナッハー	教化か、初歩要理教育か? ―『新カテキズム』についての意見―	82	1997 49～63	カテキズム
R・ジベリーニ	エコロジーに関する神学論争	82	1997 64～72	エコロジー
E・ツェンガー	我々の第一の契約 ―キリスト者にとっての旧約聖書の重要性―	82	1997 73～88	旧約聖書神学
タブレット誌	アジアの神学者が異端者として宣告され破門された	82	1997 89～94	バラスリヤ師関連
アーヘン・ミッシオ宣教学研究	バラスリヤ師の破門に関する声明書	82	1997 95～96	バラスリヤ師関連
S・パイナダス	バラスリアの事件	82	1997 97～98	バラスリヤ師関連
M・ジュリアーニ	《連載・イグナチオの霊操 第三回》霊操「第一週」の終わりの霊操者の霊的状态	82	1997 99～107	イエズス会霊性
M=J・ギュー	教会論一般	82	1997 108～115	サクラメントウム・ムンディ
高橋重幸	〈巻頭言〉「沖に漕ぎ出して網を降ろしなさい」	83	1997 2～6	修道生活
R・マックダーモット	奉献生活 ―起源二千年に向けての召命―	83	1997 7～13	回勅
J・ズートブラック	イエスの弟子であることと修道生活	83	1997 14～21	修道生活
M・ティッド	修練期の回想 ―二十世紀末の修練期を振り返って―	83	1997 22～29	修道生活
M・アンチラ	教会公文書における修道者の従順	83	1997 30～39	修道生活
A・ダレス	信仰の教會的次元	83	1997 40～51	教会論一般
O=H・ペッシュ	トリエント公会議と今日のエキュメニカル対話 ―カトリックからの展望―	83	1997 52～70	エキュメニズム
P・M・ツレーナー	再婚	83	1997 71～84	婚姻
M・ジュリアーニ	《連載・イグナチオの霊操 第四回》霊操 ひとたび霊操が達成されると	83	1997 85～89	イエズス会霊性

総目録

M=J・ギュー	教会	83	1997 90~114	サクラメントウム・ムンディ
J・ネラン	〈巻頭言〉現代におけるキリスト論とは	84	1998 2~5	キリスト論
R・ヘイト	イエスと世界の諸宗教	84	1998 6~28	諸宗教の神学
P・C・ファン	イエス —アジア人の顔をした救い主—	84	1998 29~56	キリスト論
J・マッカーシー	宇宙的キリストとエコロジー	84	1998 57~65	キリスト論
A・ラフォ	ホアン・ルイス・セグンドの「神学の深みとしての霊性」	84	1998 66~68	霊性神学
ヘルダー・コレスポンデンツ誌	決定的な歩み —義化の教説に関するルーテル並びにカトリック教会の宣言—	84	1998 69~81	エキュメニズム
T・ローシュ	明日の教会の司祭職	84	1998 82~98	司祭職
K・ラーナー	恩恵	84	1998 99~119	サクラメントウム・ムンディ
吉山登	〈巻頭言〉生命倫理と社会倫理のかかわり	85	1998 2~8	生命倫理
教皇庁立生命アカデミー	ヒト・ゲノムの研究と倫理	85	1998 9~15	生命倫理
E・D・ペレグリーノ	安楽死と介助自殺	85	1998 16~31	生命倫理
C・クンマー	子宮外墮胎? —胚の生命の始まりを決定する際の実証的証拠—	85	1998 32~38	生命倫理
D・ミート	「市場」と人間の尊厳の不可侵性 —生体臨床医学を例として—	85	1998 39~46	生命倫理
S・ベヴァンズ	アジアにおけるインカルチュレーションの歩み —アジア司教協議会連盟の二十五年間(一)	85	1998 47~66	インカルチュレーション
G・クラウス	普遍的な墮罪状態 —原罪概念に代わる類語—	85	1998 67~75	原罪
N・ローフィンク	詩編とキリスト教の黙想 —詩編を理解するための最終編集の意義—	85	1998 77~88	詩編
R・メネ	修辞分析 —聖書理解の新しい研究方法—	85	1998 89~105	聖書釈義学
タブレット誌	バラスリア師破門の撤回	85	1998 106	バラスリヤ師関連
M・シュマウス	聖霊	85	1998 107~119	サクラメントウム・ムンディ
結城了悟	〈巻頭言〉上川島からの声と日本の殉教者	86	1999 2~5	殉教者
P・C・ファン	神の国 —アジアにとって神学的シンボルか?—	86	1999 6~25	神の国
H・ヴァルデンフェルス	宗教における救いのイメージ	86	1999 26~35	諸宗教の神学
金 壽煥(キム・スファン)	アジアへの宣教	86	1999 36~44	福音宣教
K・ラーナー	キリスト教の絶対性の主張について	86	1999 45~58	教義
G・オコリンズ	イエスのイメージ —呼称によるキリスト論の再活用—	86	1999 59~79	キリスト論
J・M・カスティリョ	霊性に伴う「危険」	86	1999 80~85	霊性神学
N・ローフィンク	貧しさについての三様の語り方 —詩編一〇九をヒントに—	86	1999 86~102	詩編
K・ベルガー	救済史(一)	86	1999 103~111	サクラメントウム・ムンディ
山本襄治	〈巻頭言〉二十一世紀に向かう教会	87	1999 2~3	巻頭言
W・クラウスニッツァー	ローマ・カトリック教会と教皇職	87	1999 4~11	教導職
H・ヴァルデンフェルス	不謬性	87	1999 12~23	教導職
P・ヒューナーマン	信仰を守るために? —教義学者の反問—	87	1999 24~33	教義
L・エルシー	教会における公正と現代の法制度	87	1999 34~45	教導職
H=J・サンダー	宗教の差異 —聖なるものの多元性における信仰—	87	1999 46~62	諸宗教の神学
H・ヘーグスタド	ユダヤ人イエス —異邦人の救い主か、イスラエルのメシアか?—	87	1999 63~71	キリスト論
E・ショッケンホフ	医学研究の必要性と限界	87	1999 72~85	倫理神学一般
D・ビゾン	男性の霊性	87	1999 86~95	霊性神学
M・ケール	栄光のうちに、主よ、あなたが来られるまで	87	1999 96~101	終末論
F・A・サリバン	聖公会との対話に新たな障害	87	1999 102~105	エキュメニズム
A・ダルラプ	救済史(二)	87	1999 106~113	サクラメントウム・ムンディ
國井健宏	〈巻頭言〉新しい時代の新しい典礼?	88	2000 2~4	典礼一般
W・パネンベルク	「義認の教義についての共同宣言」	88	2000 6~9	エキュメニズム

総目録

E・ユンゲル	枢要な問題 —義認の教義についての共同宣言—	88	2000 10～17	エキュメニズム
W・カスパー	教会一致への途上における里程標 —義認の教義についての共同宣言—	88	2000 18～21	エキュメニズム
K・レーマン	どのような「コンセンサス」に到達したのか —義認の教義についての共同宣言—	88	2000 22～28	エキュメニズム
F・クーン	司牧職間の協力 —はざまに漂いながら—	88	2000 29～36	司牧
R・マッケンナ	教会の宣教使命 —G・パウムの思想分析—	88	2000 37～53	福音宣教
R・ウィークランド	地球規模化する世界、多文化の教会	88	2000 54～67	教会論一般
J・H・マッケンナ	幼児洗礼の神学的考察	88	2000 68～79	洗礼
P=H・コルベンバッハ	現代に挑戦するカトリック教育 —ポーランドでのイエズス会学校の課題—	88	2000 80～86	イエズス会霊性
W・ベッケンフェルデ	ドイツ・カトリック教会の現状 —教会法学者の目から—	88	2000 87～105	教会法
C・R・カバルス	意識の糾明	88	2000 106～115	イエズス会霊性
柳瀬睦男	〈巻頭言〉自然にあらわれた神の栄光	89	2000 2～3	自然科学と神学
G・コイン	宇宙 —自然科学の理解とその神学的意味—	89	2000 4～11	自然科学と神学
R・コルターマン	進化現象における選択の意味と役割	89	2000 12～20	自然科学と神学
J・モルトマン	霊の賜物とそのキリスト教的同一性	89	2000 21～26	聖霊
T・F・オメアラ	ターザン、ラス・カサス、ラーナー —トマス・アクウイナスの拡大された恩恵の理論—	89	2000 27～40	恩恵論
N・A・ダラヴェール	カトリック・フェミニスト神学を目指して	89	2000 41～60	フェミニスト神学
E・フックス	倫理神学の半世紀	89	2000 61～68	倫理神学一般
R・ノイデッカー	ラビ・ユダヤ教と福音書に見られる師弟関係	89	2000 69～81	ユダヤ教
H・S=シュトラウマン	「罪は女から始まり…」(シラ書25章24節)	89	2000 82～97	フェミニスト神学
C・R・カバルス	信徒のものであるイグナチオの霊性 —「イグナチオ的あり方」とは—	89	2000 98～111	イエズス会霊性
岩島忠彦	〈巻頭言〉カトリック神学のゆくえ	90	2001 2～3	宗教教育
教皇庁立生命アカデミー	ヒト胚性幹細胞の作成および科学的・治癒的用途に関する宣言	90	2001 4～11	生命倫理
J・B・メッツ	神と時 —モデルネの境域における神学と形而上学—	90	2001 12～28	基礎神学一般
A・ニコラス	キリスト教の脱西洋化 —不幸か、新たなチャンスか—	90	2001 29～45	福音宣教
G・ポツカルスキー	東西教会の分断と再合同	90	2001 46～62	エキュメニズム
L・ロース	芸術の象徴表現、文化、宗教的なもの	90	2001 63～74	典礼一般
N・ローフィンク	貧しい人は地を継ぐ —詩編37と真福八端—	90	2001 75～88	旧約聖書神学
C・M・マルティエニ	教皇ヨハネ・パウロ二世の聖地巡礼 —和解—	90	2001 89～97	神学的エッセイ
『アメリカ』誌	教会における法の適正手続き	90	2001 98～100	教導職
C・R・カバルス	現代社会における二つの霊の動き	90	2001 101～116	霊性神学
J・モラー/A・サンド	人間(1)	90	2001 117～125	サクラメントウム・ムンディ
越前喜六	〈巻頭言〉なぜ教会は学問に力をいれるべきか	91	2001 2～4	巻頭言
W・カスパー	普遍教会と地方教会との関係	91	2001 5～17	教会論一般
P・C・ファン	解放の神学の方法	91	2001 18～39	解放の神学
H・クラマー	結婚、忠実、離婚エトスの変化	91	2001 40～54	婚姻
J・ピタウ	キリスト教信仰とカトリック教育の四つのアイコン	91	2001 55～60	神学的エッセイ
J・コモンチャク	「事件」としての第二バチカン公会議	91	2001 61～84	教会論一般
W・フルスト	バーチャル・リアリティーと秘跡	91	2001 85～96	秘跡論一般
B・グロム	「エソテリック」の魅惑	91	2001 97～109	神秘主義
D・J・フィッツパトリック	親としての霊性	91	2001 110～115	霊性一般
K・ラーナー	人間(2)	91	2001 116～123	サクラメントウム・ムンディ
朴憲郁	〈巻頭言〉二十一世紀とパウロの終末論的希望	92	2002 2～4	終末論
O・ラッシュ	信仰のセンス —啓示理解の信仰—	92	2002 5～31	啓示

総目録

G・メイシー	中世初期における女性の叙階	92	2002 32～53	叙階
D・グッド	新約聖書と同性愛	92	2002 54～71	性的マイノリティー
M・ウェレット	三位一体と主の晩餐 —契約の神秘—	92	2002 72～93	三位一体
コンキリウム誌	米国同時多発テロ事件に対する宣言	92	2002 94～97	社会倫理
N・ローフィンク	旧約聖書とキリスト者の日常生活	92	2002 98～114	旧約聖書神学
H・M＝ケラー	ルカ福音書のマリア	92	2002 115～130	ルカ
S・キーヒレ	私に従って十字架を	92	2002 131～135	霊性一般
岡田武夫	〈巻頭言〉現代日本の教会のための神学的課題	93	2002 2～3	日本の神学
J・ソブリノ	犠牲者によるグローバル化の贖い	93	2002 4～20	解放の神学
E・ツェンガー	聖書の創造神学	93	2002 21～40	旧約聖書神学
J・P・マイヤー	史的イエスとキリスト教奉仕職 —その歴史的つながりはあるか？—	93	2002 41～62	キリスト論
E・T・グロツペ	イヴ・コンガールの聖霊の神学	93	2002 63～84	聖霊
C＝T・ライ	アジアの神学における宗教間対話	93	2002 85～94	諸宗教の神学
M・G・ローラー	変わりゆく結婚モデル	93	2002 95～100	婚姻
C・ドーメン	神学が祈りにとりいれられるとき(詩編103)	93	2002 101～111	詩編
B・ファイニンガー	学校での聖書教育	93	2002 112～123	宗教教育
J・ラッツィンガー	地方教会と普遍教会	93	2002 124～133	教会論一般
手塚奈々子	〈巻頭言〉教父と現代	94	2003 2～3	巻頭言
J・モルトマン	神の義認	94	2003 4～13	教父学
H＝J・レーリク	「神化」—救済論のエキュメニカルなキーワード—	94	2003 14～34	救済論
P・ヘンリッヒ	原理主義とは何か	94	2003 35～46	現代と神学
J＝L・マリオン	エマオへの道における霊的直観	94	2003 47～57	現代と神学
E・ジョンソン	神の友、預言者であるマリア —マリア伝承の読み方—	94	2003 58～71	マリア論
L＝M・ショーベ	終末論と秘跡	94	2003 72～84	終末論
J・ノイナー	啓示の豊かさ —『ドミヌス・イエズス』についての考察—	94	2003 85～93	啓示
S・フレイン	ガリラヤとエルサレム —ユダヤ復興の地理学的視点から—	94	2003 94～112	新約聖書神学
教皇庁立生命アカデミー	クローニングに関する考察	94	2003 113～121	生命倫理
小野寺功	〈巻頭言〉京都学派とキリスト教	95	2003 2～4	哲学と神学
W・カスパー	エキュメニズムの現状と将来	95	2003 5～23	エキュメニズム
J・F・キーナン	倫理神学とその歴史	95	2003 24～42	倫理神学一般
C・ベル	儀礼にまつわる歴史 —部族儀礼とカトリック儀礼—	95	2003 43～59	典礼
J・ボイトラー	キリスト教聖書の中のユダヤの民とその聖書 —教皇庁聖書委員会発表の新文書—	95	2003 60～74	聖書神学一般
R・F・タフト	聖別のないミサ？	95	2003 75～81	聖体
P・サガノ	女性助祭をめぐる議論の現況	95	2003 82～89	叙階
M・アマラドス	平和のための宗教	95	2003 90～95	アジアの神学
J・モルトマン	イエス・キリスト —犠牲者と行為者の世界における神の義—	95	2003 96～114	救済論
T・カタラ	第四世界からの神学と霊性(前編) —探し求めて出かける—	95	2003 115～129	霊性神学
大貫 隆	〈巻頭言〉イエスの絶叫	96	2004 2～3	キリスト論
神学ダイジェスト編集委員会	第二バチカン公会議四十周年 —A・ダレスとJ・オマリイの小論を読む—	96	2004 4～22	教会論一般
L・S・ケイヒル	グローバルな倫理に向けて	96	2004 23～45	倫理神学一般
J・P・マイヤー	死者の復活についての論争	96	2004 46～65	新約聖書神学
E・M・ファーベル	一つの始まりである終わり —キリスト教から見たリインカルネーション—	96	2004 66～84	終末論
D・J・シモン	スキレバークスの救済論 —終末的救いと社会的政治的解放—	96	2004 85～113	終末論

総目録

T・カタラ	第四世界からの神学と霊性(後編) —探し求めて出かける—	96	2004	114~128	霊性神学
カトリック信者の諸権利協会	カトリック教会会憲(ARCC試案)	96	2004	129~141	信仰生活
イオアン高橋保行	〈巻頭言〉現代とエキュメニズムと正教	97	2004	2~4	エキュメニズム
C・スタモウリス	エキュメニズム的教会論と三位一体の交わり	97	2004	5~17	エキュメニズム
J・Y・タン	アジア特別シノドス「提題解説」に対する日本とインドネシアの公式回答	97	2004	18~34	アジアの教会
P・C・ファン	宗教上の多重帰属	97	2004	36~57	アジアの神学
A・ピエリス	教会はアジア的すぎるか —N・タナーに応じて—	97	2004	58~69	アジアの教会
E・ツェンガー	男と女として造られた人間 —創世記2~3章を読む—	97	2004	71~76	創世記
J・マナス	セクシュアリティ、独身制、信仰の探求	97	2004	77~92	婚姻
G・コールマン	同性結合と結婚	97	2004	93~104	性的マイノリティー
J・セルヴェ	受肉におけるマリアの役割	97	2004	106~123	マリア論
S・マリーニ	歴史としての賛美歌 —賛美歌に見るアメリカ初期福音主義— (前編)	97	2004	124~133	典礼史
稲垣 良典	〈巻頭言〉「神学すること」について考える	98	2005	2~4	巻頭言
K・アングレート	政治的問題としての—神論— —キリスト教的終末論から考える—	98	2005	5~22	神概念
K・R・ハイメス	正戦と軍事介入	98	2005	23~35	戦争
J・フレデリックス	カトリック教会と他宗教 —真実で尊いものを何も排除しない—	98	2005	36~60	諸宗教の神学
T・シュナイダー	共同聖餐への道? —カトリック的視点からの検討—	98	2005	61~82	エキュメニズム
S・ヘル	ルーテルとの共同聖餐 —見通しと限界、カトリックからの提言—	98	2005	83~96	エキュメニズム
H・フランケレ	「聖書」神学とは? —意味論的・史的考察—	98	2005	97~114	新約聖書神学
P=H・コルベンバッハ	霊操と協働者たち	98	2005	115~121	霊的指導
R・ハメル、M・パニコラ	生命維持は義務か? —伝統的教説とその修正について—	98	2005	122~131	生命倫理
S・マリーニ	歴史としての賛美歌 —賛美歌に見るアメリカ初期福音主義— (後編)	98	2005	132~143	典礼史
梶山 義夫	〈巻頭言〉職員室の中で近頃思うこと	99	2005	2~5	宗教教育
S・ミーディマ、W・L・ウォーデッカー	ミッションスクールのアイデンティティーと生徒のアイデンティティー形成	99	2005	6~19	宗教教育
T・H・グルーム	総合的信仰教育	99	2005	20~30	宗教教育
F・C・ミュラー	修道会による学校への支援(スポンサーシップ) —カトリック学校の伝統を守るために—	99	2005	31~50	宗教教育
C・ウーリンガー	「塔のある町を建てよう…」	99	2005	51~60	創世記
M・E・グラハム	人は何によって倫理的に善とされるか —J・フックスによる倫理的善と救いに関する考察—	99	2005	61~81	倫理神学一般
J・マツタム	恩恵の神学	99	2005	82~97	恩恵論
G・アウグスティン	全体的(ホーリスティック)な霊性の土台としての創造信仰	99	2005	98~114	霊性神学
E・クンツ	日常における神認識の場とは?	99	2005	115~124	神体験
H・M・カスティーリョ	キリスト教の霊性の中心	99	2005	125~135	霊性神学
佐久間 勤	〈巻頭言〉神学ダイジェスト100号記念によせて	100	2006	2~4	巻頭言
光延 一郎	神学ダイジェスト100号に添えて	100	2006	5~7	巻頭言
K・ラーナー	—カトリック神学者の経験	100	2006	8~23	カール・ラーナー
百瀬 文晃	カール・ラーナーの神学と日本	100	2006	24~38	カール・ラーナー
K・レーマン	教会にとってのカール・ラーナーの意義	100	2006	39~54	カール・ラーナー
K・P・フィッシャー	『教会の構造改革』再読	100	2006	55~73	カール・ラーナー
C・ケッペラー	カール・ラーナー恩恵論の核心 —アンリ・ド・リュバックとの対比において—	100	2006	74~96	カール・ラーナー
R・A・ジーベンロック	カール・ラーナー資料室での経験	100	2006	97~109	カール・ラーナー
J・ソブリノ	ラテン・アメリカから見たカール・ラーナー	100	2006	110~128	カール・ラーナー
P・エンディーン	英語圏におけるカール・ラーナー	100	2006	129~150	カール・ラーナー
A・ラフェルト	カール・ラーナー研究のために	100	2006	151~158	カール・ラーナー

総目録

濱尾 文郎	〈巻頭言〉第二バチカン公会議後の教会と現状の要望	101	2006 2~7	第二バチカン公会議
J・W・オマリ	第二バチカン公会議 —伝統との非連続性—	101	2006 8~34	第二バチカン公会議
A・ダレス	『教会憲章』の秘跡的教会論	101	2006 35~49	教会憲章
H・フランケメレ	『啓示憲章』の進歩と停滞	101	2006 50~57	啓示憲章
J・マケヴォイ	『現代世界憲章』の意義	101	2006 58~77	現代世界憲章
C・テオバルト	第二バチカン公会議文書の内的原則と今日的課題	101	2006 78~101	第二バチカン公会議
F・A・サリバン	司教協議会に教導権はあるのか	101	2006 102~121	教導職
P=H・コルベンバッハ	今日における霊操の教会規定 —公会議後の教会において考え、判断し、感じるための諸	101	2006 122~131	イエズス会霊性
西山 俊彦	〈巻頭言〉至高の福音のささやかな理解と実現のために	102	2007 2~7	霊性神学
J・A・エストラダ	現代の挑戦と教会の人間性回復	102	2007 8~21	霊性神学
A・ニコラス	アジアにおけるキリスト教の危機	102	2007 22~30	霊性神学
陳 南州	状況(コンテクスト)に根差した普遍性に向けて —台湾基督長老教会の神学と実践—	102	2007 31~51	霊性神学
J=Y・カルヴェ	社会使徒職とその霊性 —イエズス会の取り組み—	102	2007 52~61	イエズス会霊性
P・シェルドレイク	歴史の中の霊性 —社会的観点から—	102	2007 62~74	霊性神学
H・ケスラー	復活をどのように考えるのか?	102	2007 75~84	キリスト論
C・ヤンセン	政治的抵抗者としてのイエスの想起 —旅の途上のキリスト論(ルカ24章13~35節)—	102	2007 85~92	新約聖書神学
R・S・スギルタラージャ	多宗教社会における聖書解釈 —パウロの「回心」の再読を例に—	102	2007 93~105	聖書釈義学
C・M・マルティニ	B・ロナーガンの教会への奉仕について	102	2007 106~120	ロナガン
小田 武彦	日本におけるカトリック学校の課題	103	2007 2~12	巻頭言
F・ウィルフレッド	今日の大学における神学研究	103	2007 13~22	カトリック学校
J・R・コノリー	カトリック大学における神学	103	2007 23~39	カトリック学校
M・T・ハリナン	岐路に立つ米国のカトリック学校	103	2007 40~63	カトリック学校
J・J・ディジャコモ	カトリック学校への提言	103	2007 64~70	カトリック学校
A・ライダー	大バシレイオスの聖霊論	103	2007 71~81	聖霊
W・レーザ	ハンス・ウルス・フォン・バルタザールとそのイグナチオ的—教父的源泉	103	2007 82~91	バルタザール
S・v・アーブ	健康と医学の神学に向けて	103	2007 92~101	現代神学
M・ノイマン	霊的旅路での聖書の役割	103	2007 102~111	霊的指導
M・エープナー	イエスの悪魔祓いをめぐる論争	103	2007 112~119	新約聖書神学
M・フランシス	トリエントのミサを認める自発教令	103	2007 120~125	回勅
竹内 修一	〈巻頭言〉いのちへの覚醒	104	2008 2~5	生命倫理
B・V・ジョンストン	カトリック倫理神学における伝統論	104	2008 6~23	生命倫理
J・F・キーナン	性と倫理神学をめぐる議論	104	2008 24~40	生命倫理
J・M・マクダーモット	『フマーネ・ヴィテ』再読	104	2008 41~66	生命倫理
T・A・サルズマン、M・G・ローラー	真に人間的な性における性的補完性	104	2008 67~89	生命倫理
J・シェッファー	環境倫理のための神学的枠組み	104	2008 90~110	環境倫理
J・F・キーナン	司祭の倫理的権利の構築を目指して	104	2008 111~124	司祭職
宮本 久雄	〈巻頭言〉ナザレのイエス	105	2008 2~6	巻頭言
W・レーザ	『ナザレのイエス』への十二の手引き	105	2008 8~25	回勅
T・ゼーディング	—聖書学者の応答	105	2008 26~37	回勅
P・スタインフェルズ	神の御顔たるイエス	105	2008 38~42	回勅
T・W・ティレイ	新たなイエス研究 —史的イエスでなく、歴史上のイエスを—	105	2008 43~69	新約聖書神学
D・ベラー	シオンの娘マリア —聖書の中のイエスの母—	105	2008 70~82	マリア論
K・レーマン	「キリストの教会はカトリック教会の中に存在する」 —『教会憲章』第8項をめぐるカトリック	105	2008 83~95	教会論

総目録

M・カイザー	離婚して再婚した信徒の秘跡受領	105	2008 96~106	婚姻
C・M・マルティニー	ポストモダン世界の信仰教育	105	2008 107~112	宗教教育
K・フェヒテル	今日の司祭養成のために —イグナチオの司祭像—	105	2008 113~125	司祭職
朴 憲郁	〈巻頭言〉使徒パウロの使信から聞き分ける	106	2009 2~4	パウロ神学
D・M・ノイハウス	パウロを再発見する —パラダイム変化の試み—	106	2009 5~21	パウロ神学
N・パウメルト	新しいパウロ観	106	2009 22~48	パウロ神学
G・キーレンケリイ	信仰による義認	106	2009 49~59	パウロ神学
H=J・クラウク	キリストの体 —I コリント書10~12章における主の晩餐—	106	2009 60~70	パウロ神学
F・ゴンサルヴェス	キリストと共に十字架にかかる	106	2009 71~78	パウロ神学
P・ヒューナーマン	ナザレのイエスとは誰か? —我らの友、キリスト・イエス—	106	2009 79~90	キリスト論
W・ジョンストン	宗教者は平和をもたらすことができるのか	106	2009 91~102	諸宗教の神学
D・M・ナイト	「み心の信心」の再生に向けて	106	2009 103~109	信仰生活
梅村昌弘	〈巻頭言〉『ミサ典礼書』の改訂	107	2009 2~7	ミサ
G・ダニールズ	第二バチカン公会議四十年後の典礼 —後退か、絶頂か—	107	2009 8~29	典礼一般
J・F・ボルドヴィン	典礼史の用い方の数々	107	2009 30~46	典礼史
R・F・タフト	イエズス会の典礼の課題	107	2009 47~68	典礼一般
A・T・ケイルガ	復活と葬儀典礼	107	2009 69~80	典礼神学
具 正謨	四旬節 —過越祭儀と入信の秘跡の準備—	107	2009 81~89	典礼一般
I・イエスダサン	四旬節の精神	107	2009 90~98	典礼一般
E・S・ゲルステンベルガー	神はいずこにおられるのか —詩編作者の叫び—	107	2009 99~114	詩編
具 正謨	新『ミサ典礼書』日本語訳について	107	2009 115~117	ミサ
幸田和生	〈巻頭言〉司祭が司祭であることの意味	108	2010 2~7	司祭職
K・ラーナー	回心	108	2010 8~17	ゆるし
J・フックス	罪と回心	108	2010 18~31	罪
具 正謨	回心理論と現代神学	108	2010 32~44	ゆるし
B・ロナーガン	神学の土台としての回心	108	2010 45~54	ゆるし
J=M・ローラン	司祭養成の考察(1) —感情における問題点—	108	2010 55~67	司祭職
G・クッチ/H・ゾルナー	司祭養成における心理学の貢献	108	2010 68~76	司祭職
L・コフラー	まず、あなた自身を癒しなさい	108	2010 77~80	司祭職
R・ストレンジ	叙階 —我が道ではなく、イエスの道—	108	2010 81~84	司祭職
R・コルターマン	進化と創造	108	2010 85~100	自然科学と神学
J・シュミット	進化と創造信仰	108	2010 101~117	自然科学と神学
理辺良 保行	〈巻頭言〉「時のしるし」としてのエコロジカル・クライシス	109	2010 2~3	エコロジーの神学
A・C・アギレ	エコロジーの神学 —認識論的アプローチ—	109	2010 4~16	エコロジーの神学
F・ウィルフレッド	諸宗教によるエコロジーの神学に向けて	109	2010 17~30	エコロジーの神学
N・ダーラー	地球の霊性と禁欲の神学	109	2010 31~41	エコロジーの神学
フランススコ会(小さき兄弟会)「正義と平和および	エコロジカルな回心と環境正義 —実践のための手引き—	109	2010 42~49	エコロジーの神学
R・イルクナー	「我々の同意において我々は罪を犯す —罪の神学のアウグスティヌス的範型をめぐって—	109	2010 50~61	罪
M=L・グーブラー	イエスの復活 —神の国の告知としての復活信仰—	109	2010 62~73	復活
C・W・トロール	キリスト教徒とイスラム教徒の共同の祈り	109	2010 74~89	イスラム教
J=M・ローラン	司祭養成についての考察(二) —感情と霊的生活—	109	2010 90~102	司祭職
K・F・ペクラーズ	信仰を伝えるために	109	2010 103~108	現代世界と信仰
岩島 忠彦	〈巻頭論文〉今日におけるキリスト論 —その諸傾向と課題—	110	2011 2~19	キリスト論

総目録

T・G・ワイナンディ	カルケドン公会議 —キリスト論の現代的諸問題—	110	2011 20~37	キリスト論
E・ツェンガー	ユダヤ教の視点におけるキリスト教の神論 —いまだかつて、神を見た者はいない(ヨハネ1	110	2011 38~49	ユダヤ教とキリスト教
J・グラナドス	マリアの記憶がキリスト理解に果たす役割	110	2011 50~62	キリスト論
M・アマラドス	世俗主義に対する宗教の答え	110	2011 63~77	世俗主義
H・シェーンドルフ	哲学と神学 —様々な姿を示す関係性—	110	2011 78~97	哲学と神学
T・シェルトル	基礎神学の位置確認 —ポストリベラル神学を背景に—	110	2011 98~114	基礎神学
J=M・ローラン	司祭養成についての考察(三) —二つの識別—	110	2011 115~128	司祭職
カトリック教育聖省	カトリック学校における教育の宗教的次元 —評価と刷新のためのガイドライン—	110	2011 129~137	カトリック学校
川中 なほ子	〈巻頭論文〉ニューマン枢機卿の紋章「心が心に語りかける」	111	2011 2~14	ニューマン
J・H・ニューマン	成義論	111	2011 15~24	ニューマン
J・H・ニューマン	教会の三職	111	2011 25~40	ニューマン
J・H・ニューマン	『平明教区説教集』	111	2011 41~49	ニューマン
J・H・ニューマン	理性との関係から見る信仰の本性	111	2011 50~63	ニューマン
J・H・ニューマン	キリスト教教理発展論	111	2011 64~86	ニューマン
J・H・ニューマン	同意の法則	111	2011 87~114	ニューマン
P・ミルワード	〈特別寄稿〉ニューマン枢機卿の列福	111	2011 115~123	ニューマン
カトリック教育聖省	カトリック学校における教育の宗教的次元 —評価と刷新のためのガイドライン—(第二回)	111	2011 124~133	カトリック学校
神学ダイジェスト編集委員会	J・H・ニューマン主要文献(邦語)	111	2011 134	ニューマン
日本聖公会(訳)	東日本大震災のための祈り	112	2012 2~3	苦難
菅原 裕二	災害を前にして	112	2012 4~8	苦難
R・シュペーマン	東日本大震災と原発をめぐるドイツ人哲学者との対話	112	2012 9~19	苦難
山脇 直司	〈解説〉ローベルト・シュペーマンの人と思想	112	2012 20~22	シュペーマン
W・グリム	東日本大震災一年を迎えて	112	2012 23~26	苦難
ザ・ワード・アマング・アス	なぜ善人に悪いことが起こるのか —ヨブ記に見る苦しみの神秘—	112	2012 27~32	苦難
A・エルヴィー	灰と塵のエコロジー神学	112	2012 33~44	苦難
E・クンツ	神の全能を語ることは今日なお意味があるか?	112	2012 45~57	苦難
J・ホール	神の愛から私たちを引き離すことはできない	112	2012 58~61	苦難
B・ロナーガン	み心の信心 —主イエスと無原罪のマリアに—	112	2012 62~67	苦難
宮本 久雄	プロメテウスの火か、聖霊の火か	112	2012 68~78	苦難
日本カトリック司教団	いまずぐ原発の廃止を —福島第一原発事故という悲劇的な災害を前にして—	112	2012 79~85	苦難
姜 禹一	済州島ガンジェオン村に始まるアジア平和	112	2012 86~92	苦難
カトリック教育聖省	カトリック学校における教育の宗教的次元 —評価と刷新のためのガイドライン—(第三回)	112	2012 93~102	カトリック学校
百瀬 文晃	〈巻頭言〉第二バチカン公会議を支えた神学者たち	113	2012 2~4	第二バチカン公会議
M-D・シュニユ	教会の三位一体的基盤	113	2012 5~18	教会
Y・コンガール	神の母性と聖霊の女性性について	113	2012 19~28	聖霊
E・スキレバークス	すべての信者の教導権 —新約聖書の構造より—	113	2012 29~44	教導権
K・ラーナー	信仰、希望、愛	113	2012 45~51	信望愛
H・U・v・バルタザール	すべての霊性の規範としての福音	113	2012 52~61	霊性
X・レオン・デュフル	「わたしの記念としてこれを行いなさい」	113	2012 62~69	聖餐
J・ダニエル	ヨブの四つの顔	113	2012 70~81	ヨブ記
H・ド・リュバック	護教論と神学	113	2012 82~95	基礎神学
W・バイネルト	第二バチカン公会議の背景と軌跡	113	2012 96~109	第二バチカン公会議
カトリック教育聖省	カトリック学校における教育の宗教的次元 —評価と刷新のためのガイドライン—(第四回)	113	2012 110~125	カトリック学校

総目録

高祖敏明	〈巻頭言〉上智大学創立百周年の歴史を未来につなぐもの	114	2013 2～10	カトリック学校
米国イエズス会大学協会	イエズス会の教育とイグナチオ的教育法	114	2013 11～15	カトリック学校
尾原 悟	キリシタン時代のイエズス会教育 —ザビエルの宿願「都に大学を」—	114	2013 16～24	カトリック学校
レンゾ・デ・ルカ	対話的宣教とイエズス会の教育 —南米と日本での宣教を比較した考察—	114	2013 25～37	カトリック学校
P・サムウェイ	希望の学校「信仰と喜び」 —チャドとハイチでの実践—	114	2013 38～43	カトリック学校
V・スチュワート	世界を教室に	114	2013 44～51	カトリック学校
イエズス会アジア太平洋協議会	東チモールへの聖イグナチオ学院	114	2013 52～56	カトリック学校
ベネディクト十六世	教育に携わる修道者とカトリック校の学生に向けて	114	2013 57～63	カトリック学校
浦 喜孝	カトリック教育に関するバチカン公文書 —公文書解説・日曜日の教育学—	114	2013 64～82	カトリック学校
カトリック教育聖省	カトリック学校における教育の宗教的次元 —評価と刷新のためのガイドライン—(第五回)	114	2013 83～92	カトリック学校
F・J・マルティネス＝メディナ	神の言葉と聖画像の関係性	114	2013 93～105	図像学
G・モンタギュー	聖ルカからの手紙	114	2013 106～110	黙想
J・A・コモンチャク	ベネディクト十六世の謙遜 —求められるローマの謙遜—	114	2013 111～114	教皇
J・カー	見過ごされた愛の教え	114	2013 115～117	教皇
M・ヘブルスワイテ	暗い日々から春へ	114	2013 118～122	教皇
D・オレアリー	跪く権威	114	2013 123～126	教皇
浜口 末男	〈巻頭言〉信仰を生きる	115	2013 2～5	信仰生活
V・ロスキー	信仰と神学 —『正教神学概論』(第一回)—	115	2013 6～21	ギリシャ正教の神学
V・ロスキー	二つの一神教と三位一体 —『正教神学概論』(第一回)—	115	2013 22～44	ギリシャ正教の神学
磯村 ロサ	交わりのうちに	115	2013 45～46	随想
B・クノルン	神に向かい、神と語り合う —霊操による対話—	115	2013 47～65	霊操
N・スタンダート	イエスと出会うために —霊操に於ける「場所の設定」—	115	2013 66～80	霊操
N・ヒンターシュタイナー	新時代の宗教的成長のために	115	2013 81～92	宗教心理
A・コント＝スポンヴィユ	魂の救い	115	2013 93～104	無神論
C・テオボルド	司教の団体性における「時のしるし」の識別 —第二バチカン公会議の未知なる体験—	115	2013 105～114	司教の団体性
A・メニケス	捕囚期以前の唯一神礼拝に関する神学的発展史	115	2013 115～124	古代イスラエル史
百瀬 文晃	〈巻頭言〉下からのキリスト論	116	2014 2～4	キリスト論
G・グティエレス	神について語る —解放の神学の方法—	116	2014 5～13	解放の神学
L・ボフ	解放のプロセスとイエス・キリストにおける救い	116	2014 14～27	解放の神学
J・ソブリノ	ラテンアメリカ —罪とゆるしの地—	116	2014 28～42	解放の神学
A・ピエリス	イエスの貧しさに倣うとは	116	2014 43～57	清貧
E・シュスラー＝フィオレンツァ	フェミニスト神学の役割 —沈黙を破り、存在を示す—	116	2014 58～72	フェミニスト神学
H・キュンク	エキュメニカルな諸宗教の神学に向けて	116	2014 73～82	エキュメニズム
R・パニカー	至高体験 —東洋と西洋—	116	2014 83～95	諸宗教の神学
N・ローフィンク	主の祈りとモーセ五書	116	2014 96～102	主の祈り
V・ロスキー	創造(一節～三節) —『正教神学概論』(第二回)—	116	2014 103～118	ギリシャ正教の神学
岡田 友季子	〈巻頭言〉共同宣教司牧を通して	117	2014 2～4	信徒使徒職
P・レイクランド	「信徒」の概念	117	2014 5～13	信徒使徒職
M・C・L・ビンゲメル	第二バチカン公会議と信徒の登場	117	2014 14～22	信徒使徒職
W・ザイベル	教会における信徒	117	2014 23～25	信徒使徒職
A・J・ベヴィラクア枢機卿	信徒の役割 —ヨハネ・パウロ二世『信徒の召命と使命』より—	117	2014 26～38	信徒使徒職
有村 浩一	〈解説〉『信徒教会奉仕職の召命と公認』より	117	2014 39～41	信徒使徒職
C・A・ポバーツ	霊の賜物とキリストの体(一コリント12～14章)	117	2014 42～56	信徒使徒職

S・K・ウツド	信徒教会奉仕職の公認	117	2014	57～68	信徒使徒職
F・ジョージ枢機卿	これからの信徒教会奉仕職	117	2014	69～78	信徒使徒職
K・キルビー	二番目の性？ —新しい「女性神学」について—	117	2014	79～84	フェミニスト神学
W・J・バイロン／C・ゼヒ	彼らはなぜ教会から離れたか？	117	2014	85～91	司牧神学
V・ロスキー	創造(四節～六節) —『正教神学概論』(第三回)—	117	2014	92～109	ギリシャ正教の神学
中野 裕明	〈巻頭言〉聖ヨハネ・パウロ二世の思想	118	2015	2～5	ヨハネ・パウロ二世
J・セイヴィス	ヨハネ・パウロ二世の四半世紀	118	2015	6～9	ヨハネ・パウロ二世
M・トライポール	反対を受けるしるし	118	2015	10～25	ヨハネ・パウロ二世
A・ダレス枢機卿	ヨハネ・パウロ二世の信仰の神学	118	2015	26～39	ヨハネ・パウロ二世
A・ダレス枢機卿	新しい福音宣教	118	2015	40～54	ヨハネ・パウロ二世
D・ドール	社会的関心と連帯の教え	118	2015	55～71	ヨハネ・パウロ二世
M・パクワ	ニューエイジ運動とヨハネ・パウロ二世	118	2015	72～79	ヨハネ・パウロ二世
ヨハネ・パウロ二世教皇	結婚と聖体 —いのちと愛の賜物—	118	2015	80～92	ヨハネ・パウロ二世
神学ダイジェスト編集委員会	ヨハネ・パウロ二世教皇公文書リスト(邦語版)	118	2015	93～96	ヨハネ・パウロ二世
V・ロスキー	原罪 —『正教神学概論』(第四回)—	118	2015	97～116	ギリシャ正教の神学
松浦 悟郎	〈巻頭言〉今、問われる平和	119	2015	2～5	平和と宗教
J・モルトマン	正義の実りとしての平和	119	2015	6～20	平和と宗教
M・ヴォルフ	宗教による暴力の正当化について	119	2015	21～28	平和と宗教
R・v・ジンナー	宗教と力をめぐる政治神学	119	2015	29～38	平和と宗教
G・ヴァノニ	シャロームと聖書	119	2015	39～47	平和と宗教
姜 禹一	済州島カンジェオン村平和会議より	119	2015	48～60	平和と宗教
F・ウィルフレッド	平和と和解のための文化資源	119	2015	61～73	平和と宗教
M・ハインツ	独身制と結婚 —犠牲を分かち合う—	119	2015	74～80	修道生活
J・マローン	修道生活における老いの霊性	119	2015	81～95	修道生活
匿名	うつと共に生きる	119	2015	96～97	修道生活
K・シャッツ	再興二百年の新しいイエズス会	119	2015	98～111	イエズス会
A・スパダロ	回勅『ラウダート・シ』への手引き —創造主への賛歌 皆の家を守るために—	119	2015	112～125	環境
鳥巢 義文	〈巻頭言〉生活の中で追体験されている父と子と聖霊	120	2016	2～5	三位一体論
K・ラーナー	三位一体に関する考察	120	2016	6～30	三位一体論
B・M・ドイル	社会的三位一体神学と交わりの教会論	120	2016	31～48	三位一体論
A・デーケン	三位一体の似姿としての人間 —三位一体論的倫理のために—	120	2016	49～56	三位一体論
M・アマラドス	ただ一つの霊と神の多様性について	120	2016	57～67	諸宗教の神学
A・T・ケイルガ	今日の秘跡 —空疎な象徴主義か、オカルト的秘術か—	120	2016	68～81	秘蹟論
O・フックス	聖書の中の暴力 —すべてわたしたちを教え導くため(ロマ15・4)—	120	2016	82～95	暴力
V・ロスキー	キリスト論〈一節～四節〉 —『正教神学概論』(第五回)—	120	2016	96～117	ギリシャ正教の神学
C・ラム	家庭に関するシノドス	120	2016	118～124	家庭
光延 一郎	〈巻頭言〉『ラウダート・シ』と原子力発電	121	2016	2～5	エコロジーの神学
T・カルヒャー／J・ユーベルメッサー	私たちの姉妹である母なる大地のために	121	2016	6～9	エコロジーの神学
D・ファレス	貧しさとの惑星の脆弱さ	121	2016	10～24	エコロジーの神学
O・エーデンホーファー／C・フラツハスラント	地球共有材への配慮を！	121	2016	25～37	エコロジーの神学
L・ラリヴェーラ	イデオロギ的批判を越えて	121	2016	38～48	エコロジーの神学
ドイツ司教協議会	被造世界への義務(前編) —エネルギーとの持続可能な関わり方についての提言—	121	2016	49～64	エコロジーの神学
V・ロスキー	キリスト論〈五節～六節〉 —『正教神学概論』(第六回)—	121	2016	64～75	ギリシャ正教の神学

総目録

J・グラナドス	主の昇天の神秘	121	2016 76～91	キリスト論
J・L・スカ	民数記における古いものと新しいもの	121	2016 92～103	民数記
神庭 靖子	〈巻頭言〉さまざまな家族の形の中で子どもたちの思いは	122	2017 2～6	巻頭言
X・A・サンタマリア	結婚と離婚についてのイエスの教え	122	2017 7～15	結婚・離婚・再婚
J・M・ゴルド	結婚の不解消性の教え —真理と憐れみ—	122	2017 16～22	結婚・離婚・再婚
J・I・G・ファウス	結婚・離婚・再婚をめぐる神学的諸相	122	2017 23～31	結婚・離婚・再婚
J・マシア	夫婦の一致における約束、合意、シンボル	122	2017 32～48	結婚・離婚・再婚
E・ショッケンホフ	結婚の不解消性と再婚	122	2017 49～65	結婚・離婚・再婚
M・R・ダンジェロ	福音と家庭	122	2017 66～78	結婚・離婚・再婚
A・マッテオ	信仰なき最初の世代	122	2017 79～86	福音宣教
カナダ司教協議会	福音派キリスト教についての考察 —隣人との対話に向けて—	122	2017 87～100	エキュメニズム
ドイツ司教協議会	被造世界への義務(後編) —エネルギーとの持続可能な関わり方についての提言—	122	2017 101～116	エコロジーの神学
M・シーゲル	〈巻頭言〉社会教説とは	123	2017 2～7	社会教説
J・フェアシュトラテン	教皇フランシスコと教会の社会教説 —社会へと深く入り込みながら—	123	2017 8～16	社会教説
J・C・スカノーネ	教皇フランシスコと「民の神学」	123	2017 17～33	社会教説
C・F・ヒンジ	カトリック社会教説と労働正義	123	2017 34～48	社会教説
J・M・ベルゴリオ	キリスト教信仰とヒューマニズム	123	2017 49～54	社会教説
D・K・フィン	社会の構造的罪とは何か	123	2017 55～68	社会教説
W・G・ジャンロンド	愛と沈黙	123	2017 69～77	愛
V・ロスキー	聖霊の働き —『正教神学概論』(第七回)—	123	2017 78～89	ギリシャ正教の神学
T・ゼーディング	ルターの聖書釈義と教会改革	123	2017 90～108	ルター
竹内 修一	〈巻頭言〉人格としての性	124	2018 2～7	性的マイノリティー
S・クナウス	キリストの虹色の体とクシア神学	124	2018 8～18	性的マイノリティー
P・I・オドゾー	同性婚をめぐる議論	124	2018 19～26	性的マイノリティー
J・グラミック	米国における同性婚	124	2018 27～33	性的マイノリティー
J・クレイグ	アイルランドにおける同性婚合法化	124	2018 34～38	性的マイノリティー
R・ウィリアムズ	レイシズムと教会 —「審判の朝が来るまで、私が誰であるのか誰も知らない」—	124	2018 39～56	性的マイノリティー
J・F・キーナン	罪をめぐる新たな理解とその可能性	124	2018 57～72	罪
I・デリオ	私たちは神の導きを変えることができるのか？	124	2018 73～80	進化論と創造論
V・ロスキー	教会の神秘 —『正教神学概論』(第八回)—	124	2018 81～105	ギリシャ正教の神学
N・キング	主の祈りの翻訳 —「誘惑」もしくは「試み」—	124	2018 106～109	主の祈り
福嶋 裕子	〈巻頭言〉黙示録のヨハネを巡る歴史的状況	125	2018 2～7	黙示録
J・エバツハ	聖書の黙示文学 —「いつまでもこのままではない」—	125	2018 8～19	黙示録
X・A・サンタマリア	模範としてのヨハネの黙示録	125	2018 20～29	黙示録
C・M・アルバレス	ポストモダンにおける終末論と黙示思想	125	2018 30～42	黙示録
J・B・メッツ	時間のうちにある神 —キリスト教の黙示文学的ルーツ—	125	2018 43～54	黙示録
加藤 久美子	フクシマ後に、聖書を読む	125	2018 55～61	苦難
P・R・マッカロール	苦しみと聖なる可能性 —神は憤り、涙する—	125	2018 62～73	苦難
F・ウイルフレッド	マザー・テレサ —貧しき人々の聖人—	125	2018 74～80	聖人
V・ロスキー	像と似姿 —『正教神学概論』(最終回)—	125	2018 81～98	ギリシャ正教の神学
E・バルホルン	律法の詩編	125	2018 99～107	詩編
西原 廉太	〈巻頭言〉聖公会における女性聖職	126	2019 2～7	女性の叙階
A・トンプソン	ビンゲンのヒルデガルトはなぜ女性の司祭叙階を否定したか	126	2019 8～26	女性の叙階

総目録

J・シールス	女性の司祭職について	126	2019 27～35	女性の叙階
G・パニ	女性と助祭職	126	2019 36～46	女性の叙階
P・ザガノ	女性助祭の復活 —小教区の公正なあり方のために—	126	2019 47～54	女性の叙階
J・キッテル	助祭の霊性	126	2019 55～62	女性の叙階
S・ペムゼル＝マイヤー	ジェンダーと霊性	126	2019 63～76	ジェンダー
G・オコリンズ	『愛のよこび』とその背景	126	2019 77～94	教皇フランシスコ
R・マルクス	『ラウダート・シ』にみる教皇フランシスコの思想	126	2019 95～109	教皇フランシスコ
佐藤直子	〈巻頭言〉哲学と神学 —トマス・の形而上学と靈魂論の素描から—	127	2019 1～6	哲学と神学
C・ドアティ	ブロンデルの超自然の仮定における哲学と神学の共生	127	2019 7～31	哲学と神学
F・プランマー	ポール・リクール —哲学者にしてキリスト者—	127	2019 32～43	哲学と神学
N・A・ウオーン	ヨゼフ・ピーパーの「神学としての哲学」と科学	127	2019 44～68	哲学と神学
J・V・シャル	ラッツィンガーが語る「理性」「啓示」「思考の冒険」	127	2019 69～87	哲学と神学
A・イヴリー	教皇フランシスコとカリスマ刷新	127	2019 88～97	教皇フランシスコ
H・ヘイカー	正義を求める共苦(コンパッション)	127	2019 98～109	苦難
J・M・フェゲルト	性的虐待への取り組みに対する外部協力の可能性と限界 —聖職者主義の代わりに共感:	127	2019 110～126	性的虐待
三田一郎	〈巻頭言〉科学を通して少しでも神を理解できるか	128	2020 2～15	創造と科学
R・ヘイト	霊性、進化、創造者なる神	128	2020 16～39	創造と科学
L・ボフ/M・ハサウェイ	エコロジーと自然の神学	128	2020 40～50	創造と科学
D・M・ノスウェア	教会の使命としてのエコロジー正義 —宇宙の救済のために—	128	2020 51～67	創造と科学
C・ディーン＝ドラモンド	十字架と復活の知恵のしるしのもとに創造と新創造を解釈する	128	2020 68～77	創造と科学
J・F・ホート	未完成の宇宙における信仰とコンパッション	128	2020 78～91	創造と科学
ホン・ソンナム	私は思ったより大丈夫 〈連載 霊性心理〉	128	2020 92～98	霊性心理
ドイツ・カトリック正義と平和委員会	核軍縮の出発点としての核兵器非合法化	128	2020 99～118	反核兵器
勝谷太治	〈巻頭言〉新しい教会の姿、真のシノダリティ(共に歩むこと)を目指したシノドス	129	2020 1～5	若者と共に歩む教会
A・スパダロ	若者シノドスと使徒的勧告『キリストは生きている』	129	2020 6～32	若者と共に歩む教会
D・ファレス	霊的識別 —『キリストは生きている』より—	129	2020 33～45	若者と共に歩む教会
B・レップベン/J・バルツ/L・オットー/K・ヴェリン	若者の参加に基づく青少年神学	129	2020 46～53	若者と共に歩む教会
P・M・トーマス/V・ヒューネルフェルト	教会の決定に関する若者の参加	129	2020 54～60	若者と共に歩む教会
J・パーケス	「働く学校」 —イエズス会によるカトリック学校モデル—	129	2020 61～66	カトリック学校
G・ゲーデ	女性の助祭職は教会にどのような変化をもたらさうか	129	2020 67～70	女性の叙階
M・エーブナー	新約聖書は「同性愛」を禁じているのか	129	2020 80～87	性的マイノリティ
ホン・ソンナム	私は思ったより大丈夫 〈連載 霊性心理〉	129	2020 88～94	霊性心理
イ・キホン	朝鮮半島南北カトリック教会の交流	129	2020 95～108	地域教会
D・ホレンバッハ	パンデミックで最も苦しむのは誰か	129	2020 109～114	COVID-19危機
D・J・デイリー	治療配分に関するカトリック的ガイドライン	129	2020 115～124	COVID-20危機
岩本潤一	〈巻頭言〉『聖書 聖書協会共同訳』発行の意義	130	2021 1～7	聖書の翻訳と解釈
W・T・ディケンズ	典礼が聖書解釈に及ぼす影響	130	2021 8～22	聖書の翻訳と解釈
D・カーハン	聖書解釈の視点としての空間性 —ヨハネ福音書9章を例に—	130	2021 23～38	聖書の翻訳と解釈
B・トゥリムペ	間テキスト解釈とは —創世記1章とエレミヤ書4章23～28節を例に—	130	2021 39～47	聖書の翻訳と解釈
H・ホーピング	「私たちが試みに導くことのないように —主の祈りが問う、悪魔についての語りと私たちの祈	130	2021 48～57	聖書の翻訳と解釈
H・U・ヴァイデマン	「試み」と「試し」 —心騒がせる一つのテーマに関する新約聖書の解釈—	130	2021 58～72	聖書の翻訳と解釈
J・グレーシュ	翻訳学と解釈学	130	2021 73～90	聖書の翻訳と解釈
ホン・ソンナム	私は思ったより大丈夫 〈連載 霊性心理〉	130	2021 91～97	霊性心理

総目録

D・E・デコッセ	良心、カトリシズム、政治	130	2021	98～113	カトリシズムと政治
M・フォークト	神学の座としての社会的エコロジー	130	2021	114～119	カトリシズムと政治
B・マッコーミック	新回勅『フラテリ・トゥッティ』の呼びかけ	130	2021	120～124	カトリシズムと政治
岡立子	〈巻頭言〉今日のマリア論について	131	2021	1～6	マリア論
M・マッケンナ	神学の内に示されるマリア論の新たな方向性	131	2021	7～16	マリア論
I・ゲバラ/M・C・ビンゲメア	貧しい人々と現代の「霊」が示すマリアの教義の意味	131	2021	17～40	マリア論
E・A・ジョンソン	マリア研究の母体としてのガリラヤ	131	2021	41～60	マリア論
B・E・デイリー	正教会とカトリック教会の神学におけるマリア論	131	2021	61～82	マリア論
P・プロスペリ	ニコラオス・カバシラスの『受胎告知についての説教』を読む	131	2021	83～101	マリア論
J・アローショ=エステベス	聖ヨセフ年 —父の心で—	131	2021	102～105	聖ヨセフ年
ホン・ソンナム	私は思ったより大丈夫 〈連載 霊性心理〉	131	2021	106～112	霊性心理
石居基夫	〈巻頭言〉「恩恵論」に寄せて	132	2022	2～8	恩恵論
P・オキヤラハン	ルターと〈恩恵のみ〉	132	2022	9～26	恩恵論
L・マシュー・ペッティ	恩恵と経験の神学的問題 —ロナガンの視点から—	132	2022	27～46	恩恵論
D・グルーメット	恩恵と「純粹自然」 —ド・リュバックの見方—	132	2022	47～67	恩恵論
J・コブレンツ	抑鬱状態における恩恵の可能性	132	2022	68～83	恩恵論
A・パリアリーニ	旧約聖書における「食べること」の役割	132	2022	84～96	旧約聖書神学
C・ドーマン	モーセ五書の構成と内容 —五つの五分の—	132	2022	97～103	モーセ五書
ホン・ソンナム	私は思ったより大丈夫 〈連載 霊性心理〉	132	2022	104～107	霊性心理
原敬子	〈巻頭言〉女性(おんな) —存在と所有の揺らぎ—	133	2022	2～7	女性をめぐる神学
B・ハレンスレーベン	神の霊との関係における女性の神学	133	2022	10～12	女性をめぐる神学
A=M・ペルティエ	カトリック教会と女性的次元	133	2022	13～16	女性をめぐる神学
A・デルミアンス	女性の神学とフェミニスト神学	133	2022	17～37	女性をめぐる神学
P・アレン	二十年後の『女性の尊厳と使命』と課題	133	2022	38～52	女性をめぐる神学
ヨハネ・パウロ二世	女性への手紙	133	2022	53～65	女性をめぐる神学
R・R・リュースー	キリスト教伝統における性差別と女性蔑視 —解放をもたらすために—	133	2022	66～83	女性をめぐる神学
A・M・イサシ=ディアス	ムヘリスタ神学 —伝統的神学への挑戦—	133	2022	84～101	女性をめぐる神学
S・A・ボンダ	アジアのフェミニスト神学から『ラウダート・シ』への応答 —人間／男のためだけでなく—	133	2022	102～120	女性をめぐる神学
ホン・ソンナム	私は思ったより大丈夫 〈連載 霊性心理〉	133	2022	121～123	霊性心理